

岐阜県博物館調査研究報告

第 41 号

BULLETIN

OF

THE GIFU PREFECTURAL MUSEUM

No.41

岐 阜 県 博 物 館

GIFU PREFECTURAL MUSEUM

1989 Oyana, Seki City, Japan

March, 2021

目次

調査研究実績

- 黄色釉下顔料の開発について —「飛鳥井黄」と欧州諸窯の状況— 1 - 6
立花 昭
- 旧徳山村年表 国登録有形文化財・旧宮川家住宅主屋の移築に関連して 7 - 16
南本有紀
- 岐阜県関市百年公園で見つかったヒナコウモリ *Vespertilio sinensis* について 17 - 18
説田健一
- 令和2年7月豪雨で被災した押し葉標本のレスキュー活動 19 - 23
土屋寿美
- 濃州関ヶ原合戦と犬山城 (1) - (9)
山田昭彦

Contents

The results of the research

Development of underglaze yellow color

- : Asukai-ki and the situation of Europe porcelain factories 1 - 6
TACHIBANA Akira

The chronological table of TOKUYAMA village

- : According the relocation of the MIYAKAWA housing 7 - 16
MINAMIMOTO Yuki

- Asian parti-colored bat *Vespertilio sinensis* found in Seki, Gifu Prefecture 17 - 18
SETSUDA Ken-ichi

Salvage of Botanical Specimens

- Damaged by the River flood on the 2020 Heavy Rains 19 - 23
TSUCHIYA Toshimi

The expansion of Sekigahara Battle in Mino Province

- : A Focus on The Battle of Inuyama Fort (1) - (9)
YAMADA Akihiko

調査研究実績

論文等

【人文分野】

- ・山田 昭彦. 2020. 広野川事件—広野の川面を血に染めて—, 会報河川文化(92), (公社) 日本河川協会, 18-19
- ・山田 昭彦. 2021. 岐阜県博物館・戦国時代をテーマとする展示の展開—美濃・森氏小考—濃飛誌史艸(126), 岐阜県歴史資料保存協会, 6-7
- ・立花 昭. 2020. 『大倉陶園二十五年誌 人事篇』からみた同園の活動について, 近代陶磁(21), 近代国際陶磁研究会, 2-8
- ・南本 有紀. 2021. 大湫神明・白山神社例祭の現状, 大湫神明・白山神社例祭調査報告書, 瑞浪市教育委員会, 20-50
- ・岐阜県博物館. 2020. 国登録有形文化財（建造物）旧宮川家住宅主屋保存活用計画, 岐阜県博物館.

【自然分野】

- ・説田 健一. 2020. 明治時代に神官が守った白山のライチョウ, 楠田哲士編著, 神の鳥ライチョウの生態と保全 日本の宝を未来へつなぐ, 緑書房, 東京, 68-69.
- ・説田 健一. 2020. 学校理科室の標本（岐阜県博物館）, 楠田哲士編著, 神の鳥ライチョウの生態と保全 日本の宝を未来へつなぐ, 緑書房, 東京, 259-262.
- ・説田 健一. 2021. コレクション 柳原鳥類コレクション. 博物館研究 56(2): 39.

黄色釉下顔料の開発について —「飛鳥井黄」と欧州諸窯の状況—

立花 昭

Development of underglaze yellow color - Asukai-ki and the situation of Europe porcelain factories -

TACHIBANA Akira

要旨 岐阜県博物館が所蔵する西浦圓治《釉下彩鶯図花瓶》の器面には、鮮やかな黄色の加飾が施されている。この顔料は一般に「飛鳥井黄」と呼ばれており、明治29年(1896)に飛鳥井孝太郎が、黄色顔料の呈色剤として岐阜県中津川市苗木地区産のフェルグソナイトという鉱物を見出したことによって命名された。国内における釉下顔料の使用例は16世紀末頃からみられ、近代になるとお雇い外国人ゴットフリート・ワグネルの指導により技術的に大きく進展して本格化する。一方、19世紀後期の西洋では、それに先行してデンマークのロイヤル・コペンハーゲンが釉下彩製品で世界的な注目を浴び、フランスのセーヴルやドイツのマイセンなどでも、それぞれ独自の進化をみせていく。そして、19世紀末から20世紀初頭の万国博覧会会場を舞台に、洋の東西からなる釉下彩の競演がみられる最中、世界に先駆けて上品な黄色を放つこの飛鳥井黄が生まれたのである。

はじめに

日本の工芸品は、19世紀後半に欧米で開催されていた万国博覧会への出品などを通じて、大きな注目を集めることとなる。陶磁器に関しては当初、幕末から明治前期につくられた薩摩焼の金襴手が人気を博したため、京都などでも薩摩焼風の製品が焼かれ、さらに東京や横浜などでは、産地から白素地を仕入れて煌びやかな上絵付のみをおこなう窯が次々と現れた。また、各産地において培ってきた特長を生かす製造もおこなわれ、いずれも多くが海を渡っていった。

一方、ヨーロッパの先進的な陶磁器製作所は、19世紀末から20世紀初頭にいたる過程でこうした日本陶磁の影響などを受けながら、技術・技法的には釉下彩や結晶釉などの研究をおこない、デザイン的にはアール・ヌーヴォー様式を取り入れて一世を風靡していく。



写真1 西浦圓治《釉下彩鶯図花瓶》20世紀前期 当館蔵

しかしながら、日本の輸出陶磁器はこうした大局的な変化に応じることはなく、多くが旧態依然とした状態であり続けたため批判に晒された結果、改めて欧州製品に目を向ける必要に迫られた。

本稿では、このような状況下で世界的に脚光を浴びることとなる釉下彩技法のうち、当館所蔵の西浦圓治《釉下彩鶯図花瓶》(写真1)にも施されている黄色釉下顔料の「飛鳥井黄」について、開発に至る経緯や同時代につくられた欧州製品との関連を中心に論じていく。

国内における釉下彩技法の進展

すでに触れたとおり、19世紀末から20世紀初頭において、ヨーロッパや日本の窯業界で大きな成果を収めたものの一つに、釉下彩技法の進展があげられる。釉下彩とは器面を覆う透明釉の下、すなわち成形した素地上に顔料(絵具)を用いて文様を描く加飾法で、基本的に下絵付と同義であり、英語のアンダーグレイズ(underglaze)に相当する。ただし、釉下彩という場合は単色でなく、複数からなる彩色の絵付けを指すことが多い。

釉下顔料は一般に金属酸化物を呈色剤(着色剤)としており、高火度顔料と低火度顔料があって、前者は染付

など、後者はゴットフリート・ワグネル (1831-92) の旭焼などが知られる。このうち国内の高火度顔料をみると、古くは 16 世紀末から 17 世紀前期に登場した志野の鉄絵やそれに続く肥前磁器の染付、さらに幕末の釉裏紅や正円子など¹がある。近代にはいとワグネルの指導による化学的知識が広まって、多くの研究やその応用に基づいて各地での使用がみられるようになり、東京の加藤友太郎 (1851-1916)、井上良斎 (二代、1854-1905)、横浜の宮川香山 (初代、1842-1916)、有田の深海墨之助 (1845-86)、香蘭社 (1875-)、精磁会社 (1879-1896 頃)、瀬戸の川本榭吉 (二代 1852-1918)、加藤五助 (四代、1839-1905)、加藤左衛門 (二代、1832-1900)、加藤紋右衛門 (六代、1853-1911)、加藤繁十 (二代、1892-96)、美濃の西浦圓治 (五代、1856-1914)、京都の松風嘉定 (三代、1870-1928)、清風与平 (三代、1851-1914) らの作例が著名である。また、東京工業学校 (現東京工業大学) や瀬戸陶器学校 (現愛知県立瀬戸窯業高等学校)、土岐郡立陶器学校 (現岐阜県立多治見工業高等学校)、有田工業学校 (現佐賀県立有田工業高等学校) などの教育機関でも同様に試用されていた²。このうち、加藤友太郎が開発した赤色顔料の「陶壽紅」は、本稿で取りあげている飛鳥井黄と並び称される偉業といえる。

飛鳥井黄の開発

熊澤次郎吉 (1872-1958、土岐郡立陶器学校長・東京工業試験所第三部長など) は、昭和初期までに実用化をみた陶磁器に関する黄色の呈色剤を数種あげ、五酸化ウラン、酸化チタンのうちルチール、酸化アンチモンに鉛化合物との混用などについては、いずれも低火度でのみ良好に発色し、高火度には向かないという。これに対し、フェルグソナイトは高火度において良く黄色を呈すると述べている³。ただし、このフェルグソナイトによる黄色の高火度顔料が見出される以前は、「元來陶器に黄色を着焼するは餘程困難なる業にて本邦にも外國にも陶器専門家も研究して出來ず漸やく上繪にて黄色を着くるのみなりき」⁴と明言されているとおり、世界的にみても未到達の分野であった。

これを可能とした「飛鳥井黄」は、その名が冠せられている飛鳥井孝太郎が、明治 29 年 (1896) に考案した鮮やかな黄色の



写真 2 フェルグソナイト (岐阜県中津川市苗木) 中津川市鉱物博物館蔵

高火度顔料である。呈色剤となるフェルグソナイト (写真 2、フェルグソナイト、 $YNbO_4$) は希土類元素を含む複酸化鉱物で、黄色の発色には成分中のニオブ (Nb) が関係すると考えられている^{5,6}。岐阜県中津川市苗木地区などで産出し、同地区では砂鉱 (漂砂鉱床) 中に多くみられる。もとは黒色の結晶であるが、結晶面が磨滅して丸みを帯び、地元では「鼠の糞石」と呼ばれていたとされる⁷。

また、これを考案した飛鳥井孝太郎 (写真 3) は、慶応 3 年 (1867) 加賀国 (現石川県) 大聖寺に生まれ、東京工業学校でワグネルの指導を受けて明治 23 年 (1890) 卒業、同 29 年 (1896) 森村組入社、同 44 年 (1911) には帝国製陶所 (後の名古屋製陶所) を創立して取締役技師長就任、昭和 2 年 (1927) 没した。



写真 3 飛鳥井孝太郎 (小野賢一郎『陶器大辞典』寶雲舎より転載)

この開発をめぐる経緯は、『大日本窯業協会雑誌』⁸のなかで、飛鳥井孝太郎、寺内信一 (1863-1940、陶彫家・有田工業学校長など)、田村典瑞 (?-1908、農商務省地質調査所) らが、それぞれの立場で論じている。やや錯綜する面もみられるので、以下に内容の一部を補足、整理したうえで可能な限り時系列にしたがってまとめた。なお、文頭の () 内は各事項の論者を指している。

(飛鳥井) 東京工業学校在学中、ゴットフリート・ワグネルの指導により青磁の研究をおこなうが、成果を出すに至らなかった

(飛鳥井) 続いて三田青磁会社においても試験するが不調で、清風与平から人工の顔料でなく、天然鉱物を使用したほうが良いとのアドバイスをうけ、以後の試験に取り入れる

(飛鳥井) 同志社の陶器科々長 (陶磁器科教授) のとき (明治 24-25 年頃か)、ハリス理科学学校に多くの鉱物が収蔵されていたため、その試験をおこなう

(飛鳥井) 同所において国内産出の鉱物の出所を調べるなかで、恵那郡高山 (現中津川市高山) 付近で各種鉱物が産出していることを知り、特にルチールを求めて訪問したいと考えるが叶わず

(田村) この鉱物を初めて入手したのは、明治 25 年 (1892) 冬のこと。菊池安 (1862-94、鉱物学者・東京帝国大学教授) が高山甚太郎 (1856-1914、工業化学者・東京工業試験所長など) に分析を依頼し、実際には田

村がおこなうこととなった
(田村) 菊池もこの時点でルチールと認識
(飛鳥井) 東京工業学校の植田豊橘 (1860-1948)、平野耕輔 (1871-1947) らが黄色顔料の研究をおこなっており、さらに瀬戸の川本榊吉、加藤五助が黄色釉磁器を製造するが、いずれも発色が悪く、飛鳥井はこれを知って再度黄色顔料の研究を思い立つ
(寺内) 明治 28-29 年 (1895-96) 頃、西浦圓治の徒弟学校、多治見工業補習学校での指導のため寺内と飛鳥井は多治見に在住し、飛鳥井は日曜や祭日の休暇に恵那郡などで鉱物を採集していた
(寺内) 飛鳥井は森村組、寺内は瀬戸陶器学校に転じて多治見を去る
(飛鳥井) 明治 29 年 (1896) 3 月 22 日に恵那郡高山を訪れて同所の採鉱社で各種の鉱物を提供され、瀬戸に持ち帰って試験し、良好な結果を得る
(寺内) 飛鳥井が所持していた鉱物を瀬戸陶器学校に持ち帰り、鉱物の粉末と無色釉を混ぜて源三郎窯で試験した結果、美しい黄色釉となり、職員は大いに喜んだ
(飛鳥井) この鉱物を瀬戸陶器学校長の北村弥一郎 (1868-1926) に提供
(寺内) 北村も、菜の花を描いた小瓶を加藤周兵衛の丸窯で焼成し、黄色の発色を確認して賞賛を得る
(飛鳥井) この鉱物をルチールと考えていたが、北村はそれを否定。ただし、何かを特定するには至らなかった
(田村) 旧同僚の北村より珍しい鉱物があれば試験をしたいので送ってほしいと依頼されており、この鉱物についても分析表と現物を送った(時期については不明)
(寺内) さらに、黄色顔料を用いて「名花十友」を描いた小花瓶が製作され、飛鳥井は自身の発明を表出すべく五二会品評会の審査のため名古屋を訪れていた塩田真 (1837-1917、窯業技術指導者) にみせる
(飛鳥井) 明治 29 年 (1896) 11 月頃、農商務省地質調査所に出向いて田村と面会し、この鉱物のことが話題となる。当初、菊池もルチールと鑑定していたが疑わしかったので、田村が分析し、ついにフェルグソナイトと特定したと聞く
(田村) 北村にこの鉱物を送付後、連絡は来なかったが、飛鳥井の上京に際して磁器の黄色顔料となったことを知る
(田村) 北村から黄色を呈する焼成見本が送られてきたが、菊池はすでに没していたため見せることは叶わなかった

(田村) 明治 30 年 (1897) 『フェルグソナイト (磁器黄色顔料に就て)』大日本窯業協会雑誌に寄稿
(寺内) 命名者のフェルグソン氏も黄色顔料となり得ることを承知していなかった
(飛鳥井) 黄色顔料および釉薬の研究を北村に託して別の研究をおこなう
(飛鳥井) 黄色顔料および釉薬の技法は瀬戸陶器学校が占有し、当初は瀬戸の陶業家にすら秘匿としたが、北村が石川県立工業学校に転任後は一般に広まる
(寺内) 瀬戸の加藤五助、川本榊吉、加藤繁十、東京の井上治兵衛 (良斎)、加藤友太郎らも当該顔料を使用
(寺内) 国内の窯業地で、多少の差はあるがこの顔料が広く用いられる
(寺内) 寺内によって黄色釉下顔料は、「飛鳥井黄 (アスカイ黄)」と命名される
(寺内) 明治 32 年 (1899) 『アスカ井黄につきて』、(飛鳥井) 『磁器釉下黄色顔料発見の由來』大日本窯業協会雑誌に寄稿

以上からも飛鳥井黄については、高火度焼成に堪え、従来にはみられないほど黄色の発色が良好なことから、実に画期的な成果だったことがわかる。これは、当時の錚々たる製陶家がかぞって使用していることから明らかであり、上記記載とともに大日本窯業協会雑誌の口絵 (会員友玉園加藤友太郎君寄贈 黄暈青海波彫刻紋花瓶 黄暈フェロガソナイト) 掲載をはじめ、複数の展覧会受賞者⁹がこの開発後に自作へ取り入れていたことが確認できる。

また、加藤友太郎による陶壽紅の開発がほぼ一人の功績として完結しているのに対し、飛鳥井黄については多くの人物が関与している様子もうかがえる。このことが影響するのか、寺内は「其發明者の名を更にも云はず却て磁器と関係もなき人の發明若しくは創意の如く書けるは頗る有毒のわざなりと知られけり」¹⁰と、飛鳥井の功績が蔑ろとなっている状況を憂い、これを正すために敢えて飛鳥井黄と命名することにしたという。こうした誤解を招く状況は具体的に触れられていないが、例えば、「菊池博士が偶然の発見にて、磁器に用ゐる (フェロカソナイトに類したる鑛石) 黄色顔料」¹¹のような記述が関係しているのだろう。前記の経緯を踏まえば言うまでもなく、菊池はいち早くこの鉱物自体を取得して分析にも関わっているものの、そもそもルチールと誤認しており、さらには陶磁器の黄色顔料となりうることなど一切認識しておらず、その完成以前に他界しているため全

くの筋違いな話である。

さらに塩田力蔵（1864-1946、陶磁研究家）は、「明治二十五年中、理學博士菊池安が美濃恵那郡中津川村で一種の細石を發見し携へ歸つて、地質調査所の技手田村典瑞に分析させたところ、西洋のフェロガソナイト（Fergusonite）に類するものと判つた。日本ではヘルグソン石と稱へ、俗に茶金石などとも呼んだ。同二十九年十月、瀬戸陶器學校長の北村彌一郎は、これを田村に請ひ受け來つて、教員寺内信一に試用させたところ、初めて磁器用の黄色料たることを發見し、翌三十年三月の同校開校式で發表した。先に強火彩料だらうと認定したのが、飛鳥井孝太郎であつたから、文學博士横井時冬などによつて、それが飛鳥井黄と呼ばれるに至つた（原文ママ）」¹²と解説し、その後においても著しい情報の乱れが生じている。

改めて当事者の発言に基づけば、当初ルチールと考えられていたこの鉱物は、東京帝国大学の菊池安が最初に中津川で採集し、これを農商務省地質調査所の田村典瑞が分析してフェルグソナイトであることを突き止めた。これとは別に飛鳥井孝太郎もこの鉱物を直接、現中津川市高山の鉱山で取得して黄色顔料になり得ると確信し、瀬戸陶器學校の寺内信一の試験よつて黄色釉となることが証明された。続いて瀬戸陶器學校長の北村彌一郎も、飛鳥井（場合によっては田村）の鉱物を使って黄色の絵付けに成功している。のちに、飛鳥井と田村が面会した際、飛鳥井はこの鉱物がフェルグソナイトであることを、また田村は磁器の黄色顔料となったことを知るが、このとき菊池はすでに他界していた。その後、寺内が飛鳥井の功績をたたえて、この顔料を飛鳥井黄と名付けた、という流れが正しい。

なお、こうした混乱に直接関係するか分からないが、当時、この鉱物の産出地にほど近い茄子川村（現中津川市茄子川）で作陶していた成瀬誠志（1845-1923）も、明治27年（1894）に苗木の鉱物から「薄黄色の釉薬」を開発し、これを「誠志色」¹³と呼んでいた。実際に、濃厚な黄色の絵付けを伴う成瀬の作品も複数確認されている。

欧州における黄色顔料の状況

欧州の著名な陶磁器製作所では、伝統的に専属の化学者が在籍して技術支援がおこなわれており、多くの業績を残している。ここでは、19世紀末から20世紀初頭におけるこれら製作所の陶磁器製品¹⁴のうち、主に黄色顔料を用いた加飾について、日本の陶磁器関係者がどのように評価していたのか、同時代の報告に着目しつつ論じ

る。また、管見ながら実作品への使用例も取りあげ、飛鳥井黄の相対的な優位性についても確認していく。

釉下彩技法によつて、19世紀後期における世界の窯業界をリードしていたデンマークのロイヤル・コペンハーゲンは、「甚タ美麗ニシテ其畫風日本意匠ニ據レルモノ多ク釉薬ノ光澤美ニシテ青彩ニ緑又ハ黝色ヲ交ヘ甚タ可ナリ」¹⁵と高く評価され、早くも1892年に制作されたユニカ¹⁶作品《植物文花瓶》の絵付けに、黄褐色の顔料が施されている。ただし同製作所では、飛鳥井黄に類する鮮やかな黄色釉下顔料の使用は、その後も確認できない。一方、「一種釉薬に金屬結晶を作ることに妙を得、紅、黄、綠色自由に斜状結晶を釉面に露出せしめ殆ど松葉を砂上に散布せしか如き状を呈せり」¹⁷とあるように、結晶釉のベースとなる黄釉を確立しており、《結晶釉花瓶》には黄釉と青釉が混合したものも存在している。

19世紀末におけるフランスのセーヴルでは、硬質磁器（1400℃内外）、新磁器（1280℃内外）¹⁸、軟質磁器（1200℃内外）¹⁹など焼成温度の異なる磁器が並行して作られていた²⁰。このうち新磁器は、高温で焼成する硬質磁器のもとでは美しく発色させられなかった色彩の描写を可能とした。さらに軟質磁器は、1804年に一度生産が中止されたものの、再興によつてさらなる加飾の可能性を広げている。一方、「「シュル、クーヴェルト」即チ素焼シタル上ニ色薬ヲ施スモノ、並ニ「スー、クーヴェルト」即チ未タ焼カサル生土ノ上ニ色薬ヲ施スモノ共ニ一回ノ「グラン、フー」本窯ヲ以テ焼上クルコト是ナリ。此ノ二法中第一ハ色薬ハ瑛瑯ト共ニ鎔合シ、第二ノ方法ハ色薬ハ瑛瑯ノ下ニ嵌制セラル、而シテ二者共ニ數回反復焼上ル舊法ニ比スレハ其ノ優レルコト顯著ナリトス」²¹からわかるとおり、素焼上に絵付けするだけでなく、当時の日本では一般におこなわれていない、生素地に絵付けを施したのち焼成する釉下彩の工程も採用されていた。以上からも、セーヴルでは各様の技法を駆使し、適宜組み合わせることで表現の幅を広げており、実際に黄色を伴う加飾についても数種見出せる。例えば、淡黄色を帯びた透明釉が施されたものは、硬質磁器、新磁器のいずれにもみられる。また、黄色の絵付けについては釉上と釉下の双方に存在し、非常に濃く鮮やかな発色のものが多い。このうち上絵については、「純然タル硬磁器ヲ陳列セリ、其ノ色調極メテ濃厚ニシテ、錦窯モノ多シトス、其ノ色ハ多ク黄色空色及ヒ薔薇色等ナリ、是等ノ色ハ今日マテ硬磁器ニ多ク之ヲ見ス」²²のなかで取りあげられたものに相当している。一方、新磁器の釉下で濃い発色によつて描かれたものは、明らかに飛鳥井黄のそれとは

異なるものの、技法的な詳細について現状では推測の域を出ない。

ドイツのマイセンは、「近時磁器釉下に緑色、黄色殊に火色の赤色を用ゆることを研究し攝氏千六百度以上(ゼーゲル三角錐二十三番以上)の火度に耐へ得るものを製出したりと云ふ」²³と、各色からなる高火度釉下顔料の開発が実現していたことについて、伝聞ながら報告されている。また、同製作所の黄色釉下顔料を伴う製品について多くはないが確認できるものの、飛鳥井黄ほどの鮮明さはなく、これほどの高温で焼成されたものかを外見上で判断することは難しい。そして、「本所は釉下彩色に付輒近大に研究を施し從來不可能の事を爲せんと獨國窯業誌の報するところなれとも本邦に於ては既に釉下繪具に付ては大に發明するところありて黄色は自由に現出し赤色は最近加藤友太郎氏の發明するところとなり立派に應用せらる余輩今マイセン新製品の報を聞くも毫も新規として迎ふるに足らず寧ろ其遅きに驚くのみ」²⁴と記すように、これらの色彩による釉下彩に関しては日本に一日の長があるとの見解を示している。

オランダのローゼンブルフについて、「色彩は同國固有の意匠に依り成り釉下に諸色を薄く施すものとす而して工場は特に其の特色を發揮せしめんことに力むるが如し」²⁵と評されている。実際、その意匠は他の製作所とは一線を画しており、斬新でカラフルな絵付けは釉下のみならず、濃い黄色などによって釉上にも描かれている。

以上のとおり、欧州の先進的な陶磁器製作所を概観しても、黄色の発色には上絵や釉薬を用いるケースが多く、飛鳥井黄に並ぶ鮮明な釉下彩が施されている例はほぼみられないことから、実に傑出した完成度であったことが認められる。

おわりに

「飛鳥井黄」と称された上質な黄色釉下顔料は、世界に先駆けて飛鳥井孝太郎が考案したものである。しかしながら呈色剤となるフェルグソナイトは、早くも明治33年(1900)頃になると、「高級陶器に用ゐるよりも近頃其の原料も殆ど欠乏せり」²⁶と報告されているように、もともと産出量が少ないうえに、枯渇寸前といわれる状況に陥ったようである。こうしたなか、京都市陶磁器試験所ではこれに代わる釉下顔料を研究し、「薬劑を投合し配色宜しきを得て前記の如く完全無缺なる發明をなし此程花瓶に橙の枝に作りし儘を揮毫其の葉色を黄色にせしに頗る好成績を得」²⁷ている。

また飛鳥井は、この飛鳥井黄で功成り名遂げたのちに、

黄陶焼をはじめ釉薬や顔料について多くの論考を大日本窯業協会雑誌に掲載しており、同分野の権威者に登り詰めた。その後、森村組での硬質磁器開発をめぐる紆余曲折を経て、帝国製陶所設立に参画し、遂には近代窯業の大家をなすこととなったのである。

最後に本稿の執筆にあたって、過去に開催した「魅惑の北欧アール・ヌーヴォー 塩川コレクション ロイヤル コペンハーゲン・ビング オー グレンダール」展、および「アール・ヌーヴォーの装飾磁器 ヨーロッパ名窯 美麗革命！」展で協力いただいた日本大学の塩川博義氏、ならびに(株)ロムドシンの塩谷哲夫氏より多くの作品について実見する機会を頂戴した。また、陶磁器の技術的な考察については(株)大倉陶園の高瀬進行氏に、鈳物に関しては中津川市鈳物博物館の大林達生氏に助言いただいた。ここに改めて感謝申し上げる次第である。

参考文献

- 矢部良明ほか『角川日本陶磁大辞典』角川書店、2002年
『魅惑の北欧アール・ヌーヴォー 塩川コレクション ロイヤル コペンハーゲン・ビング オー グレンダール』同展実行委員会(岐阜県現代陶芸美術館他)、2011年
『アール・ヌーヴォーの装飾磁器 ヨーロッパ名窯 美麗革命!』岐阜県現代陶芸美術館、2015年
Bröhan-Museum. *Porzellan: Kunst und Design 1889 bis 1939 vom Jugendstil zum Funktionalismus*. Vol.1(Vol.2). Berlin: Bröhan-Museum, 1993(1996)

註

- 呈色剤として鉄絵(茶〜黒色)は酸化鉄、染付(青色)は酸化コバルト、釉裏紅(赤色)は酸化銅、正円子(ピンク色)は金を使用する。
- 立花昭「日本における釉下彩について 高火度顔料を中心に」『魅惑の北欧アール・ヌーヴォー 塩川コレクション ロイヤル コペンハーゲン・ビング オー グレンダール』同展実行委員会(岐阜県現代陶芸美術館他)、2011年、pp.156-158
- 熊澤次郎吉「陶磁器製造漫録」『大日本窯業協会雑誌』38巻454号、大日本窯業協会、1930年、pp.666-669
- 「京都陶磁器試験所の一大發明」『大日本窯業協会雑誌』8巻92号、大日本窯業協会、1900年、p.297
- 大林達生『美濃焼・瀬戸物と花崗岩』中津川市鈳物博物館、2016年、p.10
- 大林達生「ニオブ」『中津川市鈳物博物館友の会会報きらら』中津川市鈳物博物館友の会、2021年、p.2

⁷ 中津川市 鈷物博物館 収蔵品データベース
[https://jmapps.ne.jp/n_muse/det.html?data_id=388]
(最終検索日 2021年1月30日)

⁸ 田村典瑞「フェルガソナイト(磁器黄色顔料に就て)」
『大日本窯業協会雑誌』6巻63号, 大日本窯業協会,
1897年, pp. 527-531、寺内信一「アスカ井黄につきて」
『大日本窯業協会雑誌』8巻87号, 大日本窯業協会,
1899年, pp. 69-71、飛鳥井孝太郎「磁器釉下黄色顔料發
見の由來」『大日本窯業協会雑誌』8巻87号, 大日本窯
業協会, 1899年, pp. 71-73

⁹ 大日本窯業協会雑誌内で確認できる主なものは以下の
とおり。

春季美術展覧会(1899年)

二等賞銀牌 《黄地茄子図花瓶》 加藤友太郎
東海五県連合五二会(1899年)

進歩三等賞 《本窯黄釉香爐》 加藤繁十
東京陶磁工同業組合第三回競技会(1902年)

《黄地に鳥彫刻花瓶》 西浦圓治

¹⁰ 寺内信一「アスカ井黄につきて」『大日本窯業協会雜
誌』8巻87号, 大日本窯業協会, 1899年, pp. 69-71

¹¹ 横井年魚市人「磁器に用ゐる赤色顔料の發明」『大日本
窯業協会雑誌』7巻81号, 大日本窯業協会, 1899年,
pp. 314-315

¹² 小野賢一郎『陶器大辭典』寶雲舎, 1935年, pp. 84-85

¹³ 篠原守『茄子川焼』中津川市教育委員会, 1983年,
p. 116

¹⁴ 平野耕輔は、「獨逸國陶磁器製造業の概況」『大日本窯
業協会雑誌』9巻98号, 大日本窯業協会, 1900年,
p. 29-40のなかで、当時のヨーロッパ陶磁のうち美術装
飾品については以下のように8分類し、釉下に描くもの
も複数みられる。

第一、磁器釉下に黝綠、青、紫、紅等の各色を用て
素地を一部薄抹し或は全部を塗抹して素地の純白色を
抜き出し或は染付にて草花模様を以て日本風の意匠を
應用し彩畫せるコッペンハーゲン製磁器

第二、佛國、セーブル、コッペンハーゲン、ストッ
クホルム、伯林官立磁器製造所等にて製出する磁器結
晶釉(磁器釉の一部又は全部を結晶せしめ且つ其結晶
の大小形状の差異及各着色釉に依りて種々の紋様を現
出せしむるなり)

第三、陶器釉に金屬光澤を發揮し或は光澤少き金屬
色(殊に銅赤色を多しとす)を以て模様を現出する一種
の陶器

第四、マゼヨリカ製品にして釉下に各色繪具を用て

草花等を畫き或は素地を各色にて染分け無色透明の光
澤ある弱火釉薬を施したるもの

第五、陶板及磁板に各風景(遠近景)又は人物上畫付
の著しく進歩し眞に油畫又は紙片に畫きたるものと毫
も異ならざるを見る

第六、磁器素地に着色し之れに透明釉薬を施し又は
無地にて之れに彫刻或は人物浮模様を出すもの

第七、支那又は日本風の古陶器類模擬品即ち日本古
瀬戸又は古伊賀の類、抹茶器類似品、樂燒の類

第八、窯變、辰砂釉又は各種の變色釉(日本竹本氏製
出の如き)等

¹⁵ 「世界博覽會通信」『大日本窯業協会雑誌』2巻21号,
大日本窯業協会, 1894年, p. 216

¹⁶ 一般の規格量産品でなく、磁器制作所が繪付作家の芸
術作品として認めたもの。デンマーク語でユニカ(unik)、
ドイツ語でユニカート(unikat)など。

¹⁷ 「歐州大陸製陶業の大勢(承前)」『大日本窯業協会雜
誌』6巻66号, 大日本窯業協会, 1897年, p. 703

¹⁸ 新硬質磁器ともいう。1882-84年に新しく考案された
硬質磁器。従来の1400℃内外で焼成する硬質磁器に対し、
それより低い1280℃内外で焼成するもの。カオリンの含
有量が少なく硬質磁器ほどの白さはないが、高温焼成に
よる硬質磁器では美しく発色させられなかった色彩の絵
具などについての使用を可能とした。

¹⁹ 石灰やフリット(ガラス状のもの)の粉末などを配合
して1200℃内外の低い温度で焼成した磁器。硬質磁器に
不可欠なカオリンを含まないため、素地が柔らかく強度
に欠けるが、透光性があるため色釉や繪付けも容易に可能
とした。

²⁰ 今井祐子『セーヴルの新硬質磁器に関する研究—中国
磁器との關係をめぐって—』2020年, pp. 8-16

²¹ 『千九百年巴里萬國博覽會 臨時博覽會事務局報告 下』
農商務省, 1902年, pp. 416-425(復刻 フジミ書房, 2000
年)

²² 前掲21, pp. 416-425

²³ 平野耕輔「獨逸國陶磁器製造業の概況」『大日本窯業協
会雑誌』9巻98号, 大日本窯業協会, 1900年, p. 34

²⁴ 前掲23, p. 35

²⁵ 「聖路易博覽會に於ける窯業品に就て」『大日本窯業協
会雑誌』14巻164号, 大日本窯業協会, 1906年,
pp. 672-673

²⁶ 前掲4, p. 297

²⁷ 前掲4, p. 297

旧徳山村年表 国登録有形文化財・旧宮川家住宅主屋の移築に関連して

南本有紀

The chronological table of TOKUYAMA village According to the relocation of the MIYAKAWA housing

MINAMIMOTO Yuki

要旨 ダム水没のため廃村となった旧徳山村から移築復元した旧宮川家住宅主屋は、現在、岐阜県百年公園にあり、岐阜県博物館が管理・活用している。廃村・移築から30年を経て、とくに茅葺屋根の衰耗が激しく早急な対応が必要になっている当該建造物について、県では国登録有形文化財に登録し、国庫補助を活用した整備事業を進めている。その一環として刊行した保存活用計画の策定過程で作成した関連年表をもとに、廃村前後の徳山村とその民家について概観し、保存活用の意義を訴える。

はじめに

旧宮川家住宅主屋（以後、「旧宮川家」と記す）は、旧徳山村戸入（現岐阜県揖斐川町）から岐阜県百年公園（岐阜県関市）に移築復元された山村民家である。建築は明治前期に遡り、「入母屋造の茅葺きで、広間型の平面や半間毎の柱間を板張りとした外壁、土間隅部の紙漉き部屋など、美濃地方西部の山村農家の特徴をよく示す」¹として国登録有形文化財に登録されている。

旧宮川家の旧立地は、越美山地の深い渓谷沿いにある。現在、日本一の総貯水容量を有する国内最大級の中央遮水方ロックフィルダム・徳山ダムのダム湖に沈んでいる。このダムによる水没世帯数466戸は、東京都・小河内ダム（945）、岩手県・湯田ダム（622）、奈良県・池原ダム（529）に次ぐ大規模なもので、徳山村は全村水没・廃村となった。

水底の徳山村は、一方で、日本民俗学の聖地ともいえる場所である。日本初の本格的フィールドワーク「山村調査」²の調査地のひとつであり、詳細な民俗誌【桜田勝徳、1951】によって往時の姿を克明に知ることができる。以来、典型的かつ特異な山村として多くの民俗学徒が訪れ調査記録を残してきた³。民俗学のみならず村内には20を超える遺跡が点在し、縄文時代に遡る人々の生活の場であった村と、その生活を育んだ豊かな自然環境が失われることは、ダム計画当時から衝撃を以て受け止められた。とくに廃村前後の1980年代は全国的に多くの注目を集め、調査活動も活発に行われている。

令和元年度から2ヶ年にわたって旧宮川家の保存活用計画を策定するに当たり、下準備として、こうした村の動向を追い、年表を作成した。本稿はその年表とこの作業で得た所感をまとめたものである。

1 徳山ダム計画の50年

年表を見て、最初に目につくのはダム関係の記述である。ダム計画が村に最初にもたらされたのは昭和32年（1957）、二転三転を経て、最終的に徳山ダムが竣工したのが平成20年（2008）、都合50年以上かかった一大プロジェクトであった。

その一方で、村の近代化は遅々として進んでいなかった。ライフラインである電気・水道・交通網はもちろん、郵便・電話・テレビも県内で最も遅い普及である。山中の深いV字渓谷に穿たれた各集落が、長らく孤絶しつつ自助自立の生活を営んできたようすが窺われる。翻って、自然の資源を古来の知恵で活用する豊かな山村の暮らしを彷彿させもする。

実際、村は過疎化と財政難に苦しんでいた。廃村後を協議する揖斐郡町村長会・徳山ダム研究会（助役会）では、当初、徳山村と①藤橋・坂内・久瀬・揖斐川、②藤橋・坂内・久瀬、③藤橋・坂内、④坂内、⑤藤橋との5合併案が検討され、①の広域合併が望ましいとされたものの、ダム計画の不透明さと徳山村の起債8億円等が忌避されて結論を先送り、県の主導で⑤案が採られることとなった⁴。合併前でも県内最少人口で、同じダム問題

を抱える隣村との最小限の合併である。これにより藤橋村は、大半の旧村民が岐阜・本巣市等に移住した無人の旧村域を加えて、全国最少の人口密度となった⁵。全国一の過疎の村となった藤橋村では、しかし、アイディアマンとして知られた中河芳美村長が、ダムを活かし、高齢化を逆手に取った村づくり構想⁶を推進したが、志半ばで病に倒れている（1991 没）。

とまれ、ダム計画が半世紀にわたって具体化しないまま残り続けることで、過疎に苦しむ中山間地域の村が積極的な地域振興策を打てないまま、じわじわと村の体力を奪われていったようすが年表から窺える。村の主幹産業であった林業、中でも製炭は燃料革命⁷によって急速に衰退し、代わって災害復興・公共工事が主要な現金収入源になった⁸。「どうせ水に沈む」「ダムができれば、企業者の協力金や交付金・固定資産税収入が見込める」と、一方でダム建設の具体化・実現をにらみつつ、一方では積極的な産業基盤・生活環境の整備がほとんどされないままであったのだ。

少子高齢化は世界の趨勢で、とりわけ日本では避けられない情勢だ。徳山ダムがなくても、徳山村の未来は明るいとは言い難かったに違いない⁹。実現しなかった中河村長のリタイアメントタウン構想は、現在なら時宜にかなった施策だったろう。それにしても、離村・廃村まで 30 年はなすすべなく過ぎていったように思われる。逆にいえば、村の生業形態・生活様式は前近代的なまま温存されていたのである。

2 徳山村の遺産：掘り起こしと継承

再び年表に目を転じると、廃村（1987）からダム竣工（2008）まで 20 年の空白がある。この間、盛んにおこなわれたのが、調査顕彰活動であった。まず、地元有志の地道な表探で等閑視されていた遺跡の存在が明らかになり、全村で大規模な発掘調査が実施された。報告書が刊行され、出土遺物は、現在、県文化財保護センターが収蔵しており、時々展示公開されている。県内考古学史においても特筆すべき事業と成果であり、この発掘に加わった多くの調査員が今も県文化行政に携わっている。

つぎに、移転に伴って家屋道具類の破却が目立つにつれ、民俗資料への関心が高まった民具は、村役場の呼びかけで組織的に収集・整理されて、国重要有形民俗文化財「徳山の山村生産用具」に結実した。これらは、現在、徳山民俗資料収蔵庫で見ることができる。

民家は廃村の少し前、1970 年代からの民家ブーム、1990 年代の古民家再生ブームにのって、引く手あまたの

状況で、村幹旋だけで 32 軒が村外に移築された。今回の追跡調査ではその内訳を知ることはできなかったが、行政による展示施設利用のほか、レストランやゴルフ場レストハウス、別荘などへの転用が多かったようである¹⁰。前者の例として岐阜県博物館の旧宮川家などが挙げられる。後者の例としては、静岡県修善寺町（現・伊豆市）に 9 軒の民家が移築され、現在も活用されている（修善寺虹の郷）¹¹。但し、修善寺の移築について現地確認した【片桐勝信, 1988】は「復元というより再利用」であると述べ、自然公園内のレクリエーション施設という利用目的から「徳山の家そのままに復元されなくてもしかたのないことであって、灰となるよりもこれだけでも残ったことに満足するより外はない」と理解を示している。片桐は商社マンとして活躍する傍ら、揖斐谷の民家の保存活動をしており、谷汲村の農家（1977）¹²に続いて、上開田・旧山崎家を解体、自身が住職を務める大野町・陽勝寺へ移築している（1984）¹³。

民家についてももう少し述べる。県内で文化財として復元移築されたもののうち、岐阜県博物館・旧宮川家は建築当初に復元され、岐阜市ファミリーパーク・旧増山家は移築当時の姿を残し、本巣民俗資料館・旧神足家は増築部分を残し、徳山村ではなかった自在鉤を追加するなど、近世～近代の古民家の類型として整備され、移築の様相も一様ではない。

また、これらは全て木造茅葺入母屋造で、草屋根は定期的なメンテナンスを前提としており、廃村・移築後 30 年を経た現在、いずれの民家も保存上の問題を抱えている。このうち揖斐川歴史民俗資料館・旧広瀬家は平成 22 年（2010）に全面葺き替えを済ませ、最も保存状態がよい。本巣民俗資料館・旧神足家は維持管理を優先して、平成 15 年（2003）にトタン板葺きに変更されている。岐阜市ファミリーパーク・旧増山家と関市中池公園・旧岩菅家は、岐阜県博物館・旧宮川家と同じく屋根材の腐朽・損耗のため立ち入り禁止になっている。往時の生活者の高齢化が進む中、茅葺きの方法のほか、緩んだ栓の締め方、茅の採取と保管など、日々のメンテナンスに関する知識は、年を追うごとに失われており、茅葺きの耐久年数の目安となる 30 年という節目に今後の継承について楽観できない状況といえる。

3 ダム移転と生活変容

人の暮らしはまさにサイトスペシフィックであり、徳山村の生活様式は周囲の自然環境を含めた徳山村でしか実現できないことは論を俟たない。離村した後も、旧村

民の旧徳山村での生活は継続していた。試験湛水（2006）が始まり、物理的に入村できなくなるまで、山菜やキノコ、木の実（トチノミ）、薬草の採集、狩猟漁撈等のために少なからぬ往来があり、ただ故郷を偲ぶためだけに短期間滞在する人もあった¹⁴。「村における間、ここでしかできんことをやっておきたい」¹⁵という無理からぬ動機である。[大西暢夫、僕の村の宝物：ダムに沈む徳山村山村生活記、1998]などのフォトドキュメントを読むと、大自然の中で生き生きと生活を営むお年寄りのたくましい姿が活写されていて圧倒される。

ところが、他方で、移転者たちには厳しい現実が待ち受けていた。山村から地方都市への移住は大きな生活変容を伴い、適応不全に陥って生活が暗転してしまう人が多く見られたのである¹⁶。

カメラばあちゃんの名を馳せた増山たづ子は「冬は仕事にならんから、昼間から集まって、飲んで、歌って、踊って、ね。それ以外の季節は冬を楽しく過ごすために働くようなもん」¹⁷と村の暮らしを懐かしんでいる。「みんな仕事を手伝ってな、歌ったり、笑ったりするうちに全部片付いてしまってる。徳山の人は物に困ったことがない。米がないといえば持ってけー。（略）みんなが助け合ってた。」¹⁸

ここに語られる濃密な人間関係はもちろん、山仕事や田畑の世話で忙しく過ごし、里山の恵みから自給自足で賄う徳山の暮らしを都市部の移転地で再現することは不可能である。もし、移転地が藤橋村や坂内村などの徳山村に似通った環境であれば結果は変わっていたかもしれない。しかし、国を挙げて向都離村の世相の当時、こんな後知恵は湧かなかっただろう。

徳山特有の栃山慣行に見られる特産のトチノミは、豊富な水量を誇る村の清流でなければあく抜きが難しい。地野菜である徳山唐辛子を使ったカラカラ大根も、焼畑で育った大根だからこそその味だった。

おわりに ダムとニューノーマル

こうして徳山村年表から徳山ダムを見ると、国の方針の紆余曲折が透けて見える。高度経済成長期に拡大を続ける電力と水使用のために計画された利水・発電ダムは、水余りになると、治水・利水・発電の多目的ダムに変更され、一時は見直し事業にも数えられた。目を現代に転じると、令和2年7月豪雨（熊本豪雨）など、頻発する水害が激甚化する昨今は、「ダムに頼らない治水」が唱えられ、凍結されていた川辺川ダムが多目的ダムから流水型ダムに仕様変更して計画推進の方向である。

「揖斐川はダムと発電所の町」という¹⁹。木曾三川のひとつ・揖斐川は、上流から徳山ダム、横山ダム、久瀬ダム、西平ダム、揖斐川支流・根尾川（本巣市）に金原ダム、上大須ダム、坂内川に神岳ダムが連なり、発電が行われている。当然のことながら、ダム建設による移転集落は徳山に限らない。

[佐藤晃之輔, 2001]によると、高度経済成長期に始まり、昭和・平成の町村合併で進む行政による廃村に加え、中山間部は、インフラ整備が遅れ、生活環境の不備や地域や時代にあった新産業の振興策が図られず、自発的な離村による廃村が進んで、多くの山村が廃絶してきた。やはり徳山の廃村はダムの有無にかかわらず不可避だったのかもしれない。

[五十嵐太郎, 2020]は「世界的にみても東京は驚くべき速度でスクラップ&ビルドがおこなわれて」おり、30年で建物が入れ替わり、絶えず街並みが更新されてきたと述べる。五十嵐が「見えない震災」と呼ぶ、この激的なスクラップ&ビルドは従来にない速度で町と暮らしを刷新している。山村とは別の理由ながら、東京ですら街並みを保つことができない現代日本のあり様から徳山廃村は当然の帰結ではあった。

さらに、徳山に関しては、現地での生活体験を持つ人々、伝承者に身近にあった人々が高齢化によって櫛の歯が欠けたようにいなくなり、懐古の情も薄れてきたように思う。平成の30年間を経て、令和の今から振り返ると、2000年代の昭和趣味はノスタルジーを実感できる最後の世代が牽引したことが了解される。囲炉裏の火に鍋をかけた実体験を持つ世代が圧倒的少数となった今となっては、徳山村の民家の作る空間は、まるで「おとぎの国」のように感じられる。徳山村そのものがない現在、旧宮川家などの移築民家は徳山のリアリティを体現する貴重な生き証人なのである。

コロナ禍で急速に普及したニューノーマルは、人と人のリアルな接触を回避させる。新型コロナウイルス流行の終息が見えない現状、実物の存在感こそが存在意義である博物館としても、今後の活動に大きな転換をもたらされざるを得ない。

そうだからこそ、博物館員として実感するのは、モノは人間よりも長生き（長持ち）するということである。家は、建てた人、住んだ人がいなくなっても残り続ける。旧宮川家は徳山村がなくなった後も30年を永らえ、今後も徳山の暮らしを後世に伝え続けていくのだ。岐阜県博物館は託された意義を強く訴えねばならないと感じている。

注

- 1 [登録有形文化財（建造物）一覧, 2018]
- 2 柳田国男らの「日本僻陬諸村に於ける郷党生活の資料蒐集調査」.[矢野敬一, 2010][田中宣一, 「山村調査」追跡調査の追跡, 2017] 参照。
- 3 研究史と旧宮川家の詳細は [岐阜県博物館, 2020] を参照。
- 4 [「広域合併は困難」徳山村問題で県に報告, 1985][藤橋村と二村合併に 県が最終方針固める, 1986]
- 5 [母なる揖斐・長良・木曾：第2部・水利用 5, 1986][消える村・徳山：2 過疎と高齢化（上）, 1987]
- 6 [消える村・徳山：3 過疎と高齢化（下）, 1987][オッふるさと：藤橋村（岐阜） 資料館充実に力入れる, 1987]
- 7 昭和30年代・高度経済成長期に起きた急激なエネルギー源の転換。石炭・薪炭が化石燃料に取って代われ、家庭用燃料も石油・ガスに転換、薪・木炭が姿を消した。（森林・林業学習館：森林・林業用語検索「燃料革命」https://www.shinrin-ringyou.com/search_term/sch.php?k=%E7%87%83%E6%96%99%E9%9D%A9%E5%91%BD）（2021年1月31日閲覧）
- 8 [田中宣一、三田村成孝、岩崎竹彦, 1986]
- 9 山村振興法に基づく「振興山村」734（全市町村の43%）は、林野面積の61%、耕地面積の22%、総人口の3%を占める。振興山村は林野面積85%、耕地面積4%。人口は45年間（1965-2010）で42%減少（全国は29%増加）。平成22年（2010）の65歳以上は34%（全国平均23%）で、他地域に先がけて高齢化が進行し、就業人口は30年間（1980-2010）で32%減少している。学校数は35年間（1975-2010）で小学校数は49%（全国は11%減）、中学校数は41%減少している。
- 振興山村の財政力指数は平均0.39、全部山村（全域が「振興山村」となっている市町村）は0.24で、全国平均0.53を大きく下回り、厳しい財政状況。（農林省農村振興局農村政策部地域振興課「振興山村をめぐる状況」https://www.maff.go.jp/j/nousin/tiiki/sanson/s_about/index.html（2021年1月9日閲覧）
- 10 [岐阜県博物館, 2020]
- 11 <https://www.nijinosato.com/>（2021年1月31日閲覧）新型コロナウイルス感染拡大のため現地確認はかなわなかった。
- 12 [現代の顔：「茅葺き民家」はかくして残った, 1977]
- 13 2020年5月22日に聞き取り。旧山崎家は壁がない状態（再建途中）である。
- 14 [ニュース・グラフ：その後の旧徳山村, 1990]
- 15 [さようなら徳山村：10 思い出づくり, 1987]
- 16 [木村一夫, 1997][浜本篤史, 2001]
- 17 [「徳山村」'92・冬：6 交友録, 1992]
- 18 [写真家・増山さん、作家・藤川氏が講演, 1991] JT いきいきフォーラム「感動上手のすすめ」紹介記事。
- 19 揖斐川歴史民俗資料館常設展示。

参考文献

新聞・雑誌記事

- 「広域合併は困難」徳山村問題で県に報告. (1985年12月17日). 岐阜日日新聞.
- 「徳山村」'92・冬：6 交友録. (1992年2月26日). 朝

日新聞.

- オッふるさと：藤橋村（岐阜） 資料館充実に力入れる. (1987年2月14日). 朝日新聞.
- さようなら徳山村：10 思い出づくり. (1987年3月14日). 中日新聞夕刊.
- ニュース・グラフ：その後の旧徳山村. (1990年7月6日). 朝日新聞.
- 現代の顔：「茅葺き民家」はかくして残った. (1977). 週刊新潮 9月29日号.
- 公共事業費6兆695億円＝国土強靱化へ「流域治水」：来年度予算案. (2020年12月21日). 時事通信社 iJAMP.
- 写真家・増山さん、作家・藤川氏が講演. (1991年10月28日). 岐阜新聞.
- 消える村・徳山：2 過疎と高齢化（上）. (1987年3月27日). 岐阜日日新聞.
- 消える村・徳山：3 過疎と高齢化（下）. (1987年3月28日). 岐阜日日新聞.

文献

- IZU PHOTO MUSEUM. (2014). 増山たづ子：すべて写真になる日まで. 静岡県長泉町：IZU PHOTO MUSEUM.
- 岐阜県教育委員会. (1971). 岐阜県の民家：岐阜県民家緊急調査報告書. 岐阜県教育委員会.
- 岐阜県教育委員会. (1972). 徳山村民俗調査：概報 昭和46年度民俗資料緊急調査. 岐阜県教育委員会.
- 岐阜県教育委員会. (1978). 岐阜県の民家：昭和52年度民家緊急調査報告書. 岐阜県教育委員会.
- 岐阜県博物館. (2020). 国登録有形文化財（建造物）旧宮川家住宅主屋保存活用計画. 岐阜県関市：岐阜県博物館.
- 吉岡勲. (1986). 徳山村門入を調査して. 著：吉岡勲, 道遙けく：一郷土史学徒のあゆみ. 岐阜市：大衆書房.
- 五十嵐太郎. (2020). 建築の東京. 東京都：みすず書房.
- 佐藤晃之輔. (2001). 秋田・消えた村の記録. 秋田市：無明舎出版.
- 桜田勝徳. (1951). 美濃徳山村民俗誌：岐阜県揖斐郡徳山村. 東京都：刀江書院.
- 小川直之、新谷尚紀. (2020). 講座日本民俗学 1：方法と課題. 東京都：朝倉書店.
- 杉本尚次. (1998). 民家の保存・再生・活用：民家野外博物館を中心として. 民俗建築 113.
- 早川典子、高橋英久. (2016). 日本における木造住宅の移

- 築事例に関する研究：保存活用を目的とした展示施設への用途変更事例を中心として。住総研 研究論文集 43.
- 大西暢夫。(1998). 僕の村の宝物：ダムに沈む徳山村山村生活記。東京都：情報センター出版局。
- 大西暢夫。(2009). 徳山村に生きる：季節の記憶。東京都：農山漁村文化協会。
- 大西暢夫。(2020). ホハレ峠：ダムに沈んだ徳山村百年の軌跡。東京都：彩流社。
- 大内田史郎。(2020). 全国の野外博物館の展示構成に関する研究。研究報告 令和元年度 建築分野 4.
- 中京大学郷土研究会。(1967). 美濃郷土文化調査報告書：揖斐 徳山編、日坂編。愛知県名古屋市：中京大学郷土研究会。
- 中谷哲二。(2002). 天理にあった合掌造り民家：ある野外民家博物館的施設の軌跡。天理参考館報 15.
- 朝日新聞社岐阜市局。(1986). 浮いてまう徳山村。愛知県名古屋市：ブックショップ「マイタウン」。
- 田中宣一。(1989). 村の解体と信仰生活の変容：徳山ダム建設による宗教施設の移転をめぐる。民俗学研究所紀要 13.
- 田中宣一。(1994). ダム建設移転に伴う世帯の変化：岐阜県揖斐郡旧徳山村民の場合。日本常民文化紀要 17.
- 田中宣一。(1994). 桁の実から桁板へ：岐阜県徳山村の桁の木利用について。著：原泰根，民俗のこころを探る。大阪府堺市：初芝文庫。
- 田中宣一。(2000). 徳山村民俗誌：ダム水没地域社会の解体と再生。東京都：慶友社。
- 田中宣一。(2017). 「山村調査」追跡調査の追跡。民俗学研究所紀要 41.
- 田中宣一。(2020). ダム建設と伝統文化。地域の伝統文化 28.
- 田中宣一、三田村成孝、岩崎竹彦。(1986). ダムに沈む揖斐川水源の村：岐阜県揖斐郡徳山村。民俗学研究所紀要 10.
- 登録有形文化財（建造物）一覧。(2018). 月刊文化財 661.
- 藤橋村と二村合併に 県が最終方針固める。(1986年2月8日)。岐阜日日新聞。
- 徳山村の自然と歴史と文化を語る集い(徳山村ミニ学会)。(1985). 美濃徳山村通信 創刊号～第12号：合本 1. 愛知県名古屋市：ブックショップ「マイタウン」。
- 徳山村の自然と歴史と文化を語る集い(徳山村ミニ学会)。(1986). 美濃徳山村通信 第13号～第24号：合本 2. 愛知県名古屋市：ブックショップ「マイタウン」。
- 徳山村の自然と歴史と文化を語る集い(徳山村ミニ学会)。(1986-87). 美濃徳山村通信 第25号～第32号。岐阜県徳山村：徳山村の自然と歴史と文化を語る集い(徳山村ミニ学会)事務局。
- 徳山村の自然と歴史と文化を語る集い(徳山村ミニ学会)。(1987). 美濃徳山村通信 第33号～第34号。岐阜県藤橋村：徳山村の自然と歴史と文化を語る集い(徳山村ミニ学会)事務局。
- 徳山村史編集委員会。(1973). 徳山村史。徳山村。
- 浜本篤史。(2001). 公共事業見直しと立ち退き移転者の精神的被害：岐阜県・徳山ダム計画の事例より。環境社会学研究 7.
- 片桐勝信。(1988). 徳山村戸入の民家、静岡県修善寺町で再建築。美濃揖斐谷通信 40.
- 母なる揖斐・長良・木曾：第2部・水利用 5。(1986年11月6日)。朝日新聞。
- 木村一夫。(1997). 多目的ダム開発と「揖斐谷」住民の変転(Ⅱ)。水資源・環境研究 10.
- 矢野敬一。(2010). 柳田国男と「山村調査」 民俗学確立期の研究体制とその運動論。静岡大学教育学部研究報告。人文・社会・自然科学篇 (61).
- 揖斐谷の自然と歴史と文化を語る集い(揖斐谷ミニ学会)。(1987-96). 美濃揖斐谷通信 第35号～第70号。岐阜県藤橋村：揖斐谷の自然と歴史と文化を語る集い(徳山村ミニ学会)。
- 落合知子。(2019). 普及版 野外博物館の研究。東京都：雄山閣。
- 脇田雅彦。(1992). 美濃・徳山村戸入：自然と人々。あしなな。
- 本稿ならびに『国登録有形文化財（建造物）旧宮川家住宅保存活用計画』執筆にあたり、旧宮川家住宅保存活用検討委員会（高橋宏之、溝口正人、佐滝剛弘、辻充孝、宮川澄雄、横田稔）のほか多くの方にご指導・ご協力賜りました。深謝いたします。なお、本文ならびに年表中は敬称略としました。

南本 有紀

徳山村年表

	徳山村と周辺のできごと	文化財・民俗学・建築史・山村振興等のできごと
紀元前2000	縄文時代中期より居住(石器・土器が出土)	
保元1 1156	上開田・六社神社創建	
延元3/建武5 1338	榑原・白山神社に新田義貞自害の伝説、「仁田四郎由定鳥山神社」碑に年紀	
興国1/暦応3 1340	塚白山神社神像墨書に南朝年号(興国)	
応永13 1406	上開田・六社神社鰐口銘	
文明4 1472	戸入石地藏銘	
文明8 1476	門入・八幡神社鰐口銘に「門丹生」	
天正1 1573	織田信長の朝倉攻めで朝倉方についた坂内村広瀬から徳山村戸入に移住	
天正17 1589	本郷・山手・榑原・塚・門入の検知記録あり	
天正年間 1573-93	福井県鯖江・西福寺より柴田勝家に追われて門入に避難、十字名号(伝・誠照寺3世如覚筆)が伝世	
寛文2 1662	誠照寺15世秀誠が美濃廻りを始める(夏廻り)、オマワリの開始	
元禄1 1681	専念寺が越前温見から根尾に移転、秀誠が美濃廻りのために要請	
天保13 1842		白川村大牧・旧太田家
元治1~2 1864-65	天狗党の乱、水戸天狗党が蠟燭峠を越え	
慶応4/明治1 1868	旗本徳山氏知行地が尾張藩預け、のち笠松県に	
明治4 1872	第1次府県統合で岐阜県に	
明治6 1873	戸入に文炳舎(のち徳山小学校戸入分校、徳山中学校西谷分校)を設置	
明治12 1879		社寺什宝永世保存之議二付議で社寺宝物以外に1000年以上前の建造物も保存対象に
明治15 1882		400年前の現存社寺建造物の調査を内務省社寺局通達
明治半ば~後半	旧宮川家:内部の造作と修理を実施、玄関部分の階段を付け替え	
明治17 1884		人類学研究会(のち日本人類学会)
明治22 1889	池田郡門入村・戸入村・大野郡塚村・榑原村・山手村が合併、池田郡徳山村に	『風俗画報』
明治23 1890	徳山村に郵便局開設、根尾局管轄	
明治24 1891	濃尾地震、根尾谷断層帯の活動による最大級の内陸地殻内地震(直下型地震)	
明治30 1897	揖斐郡を新設、揖斐郡徳山村となる	古社寺保存法
明治36 1903	門入から6戸21人が北海道虻田郡真狩村に入植	
明治39 1906		神奈川・三溪園
明治40 1907	藤橋村杉原より本郷に至る県道改修工事完了	
明治43 1910	鳴瀬橋を架設	柳田国男らが郷土会を設立
明治45 1912	この頃まで製紙が盛ん	
大正年間 1912-26	井戸掘り職人が来村、竪井戸を掘る	
大正1 1912	揖斐川電力(のちイビデン)設立 発電所建設開始、工事従事者の子どもが村内で初めて洋服通学	
大正3 1914	戸入・六社神社社殿を改築	
大正4 1915	徳山村に電灯がともる	
大正5 1916	門入に茅葺半二階が初めて建つ 揖斐川電力の西横山発電所完成、初の国産立軸水車を設置 この頃から段木の最盛期(～昭和6・1931)	
大正6 1917	荷車が藤橋経由で本郷に入るように 山手に分教場が開設、榑原の東谷分教場を廃止し塚分教場を開設	白茅会(佐藤功一、今和次郎、柳田国男ら)、民家の研究団体
大正7 1918	この頃、門入の民家にガラス窓が導入される	白茅会が郷土会と合同で神奈川県津久井郡内郷村に研究旅行
大正8 1919		市街地建築物法
大正10 1921	東横山発電所操業開始	
大正11 1922	久瀬村から藤橋村が分離	今和次郎『日本の民家』
大正12 1923	荷馬車が本郷に入るようになり、板板の出荷が盛んに	竹内芳太郎『飛騨白川村の民家』(『早稲田建築学報』2)
大正13 1924	橋浦泰雄『民俗探訪』『美濃越え』	
大正14 1925	広瀬発電所運用開始	8月:石原憲治が白川村御母衣・遠山家を調査
大正15 1926		白川村平瀬に発電所ができる
昭和4 1929		『東大寺南大門修理報告書』初の修理報告書刊行
昭和6 1931	この頃、板板生産がピーク(～昭和19・1944)	
昭和7 1932	この頃から段木のクダナガシが発電所・ダム建設のため衰退	
昭和8 1933	根尾村へ抜ける馬板トンネル開通 戸入大火、六社神社より東の26戸焼失 この年まで門入2戸が養蚕(夏秋2回)	江馬修が飛騨考古古俗学会を設立、『飛騨考古学会会報』(のち『ひだびと』)創刊 今和次郎らが民家研究会を発足 9/14:柳田国男の木曜会が始まる(1934:第1回開催)
昭和9 1934		川口孫次郎『飛騨の白川村』 全国山村生活調査(日本僻陋諸村における郷党生活の資料蒐集調査)(1934・5~1937・4) 柳田国男『民間伝承論』 天理参考館に朝鮮半島の民家を移築 石原憲治『日本農民建築』全部16巻、刊行開始
昭和10 1935	川上発電所完成	民間伝承の会(のち日本民俗学会1949~) 柳田国男編『山村生活調査第1回報告書』 柳田国男『国史と民俗学』『郷土生活の研究法』 沢沢敬三らが日本民族学会(のち日本文化人類学会)を設立
昭和11 1936	山村生活調査の一環として桜田勝徳が徳山村調査(昭和14・1939再訪) 西平ダム着工	柳田国男編『山村生活調査第2回報告書』 民家研究会機関紙『民家』
昭和12 1937		柳田国男編・民間伝承の会『山村生活の研究』 大阪・吉村家住宅、奈良・今西家書院が国宝指定(国宝保存法)
昭和13 1938		柳田国男編『海村生活調査報告書(第1回)』 沢沢敬三らが野外博物館計画(頓挫)の一環として武蔵野の民家・絵馬堂を移築
昭和14 1939	西平ダム竣工、これ以降、段木流しなくなる 本郷・徳山郵便局に村初の電話開通	江馬三枝子『合掌造り民家と大家族制度』 ブルーノ・タウト『日本美の再発見』

旧徳山村年表 旧徳山村民家(旧宮川家住宅主屋) 移築経緯に関連して

		徳山村と周辺のできごと	文化財・民俗学・建築史・山村振興等のできごと
昭和15	1940	揖斐川支流坂内川に揖斐川電気(揖斐川電力を改称、現イビデン)が神岳ダムを建設、川上発電所の取水ダム 西平発電所の運用開始	
昭和17	1942	山手大火、33戸全焼	
昭和18	1943		江馬三枝子『白川村の大家族』
昭和19	1944	昭和東南海地震(東海地方は震度5)	京都・小川家住宅(二条陣屋)を国宝指定
昭和20	1945	三河地震(岐阜県は震度4) 本郷から門入への道路改修始まる(～昭和28・1953頃) この頃から炭焼きが盛ん(～昭和30・1955) この前後、養蚕が盛ん この頃から紙漉きが衰退 これ以降、カルサンからモンベへ移行	
昭和22	1947	7月:本郷大火、ペニヤ工場倉庫から出火、50戸全焼	
昭和24	1949	自家発電を申請 榑原分校舎を建設、集落独自で実施 この頃、門入の民家にトタン葺きが導入される	民間伝承の会を改称して、日本民俗学会 『海村生活の研究』 1/26:法隆寺金堂焼失
昭和25	1950	5月:本郷・開田が自家発電により点灯(徳山電力消費生活協同組合)	日本民俗建築学会発足、『民俗建築』発刊 建築基準法 5月:文化財保護法
昭和26	1951	榑田勝徳『美濃徳山村民族誌』、山村調査成果を刀江書院「全国民俗誌叢書」の一冊として刊行 岐阜方面への出稼ぎ者対象に旅館・徳山連絡所いずみ屋(岐阜市)開業	この年、白川村内に270棟の合掌造り
昭和26・27	1951・52	この頃までオマワリ様は徒歩で峠越え	
昭和28	1953	徳山村大火 久瀬ダム	重要文化財・吉村家住宅(大阪)民家建築として初の根本修理、報告書刊行
昭和29	1954	5/13:再び本郷大火、増徳寺から失火、118戸全焼	武蔵野郷土館(～1991・江戸東京たてもの園1993～) 白川村・鳩谷発電所
昭和29～48	1954-73	高度経済成長	
昭和30～40年代			明治期洋風建築・民家の保存が急務に、文化庁・建築学会等が調査実施
昭和30	1955	この頃から本郷～門入の道路改修により門入～坂内村のホハレ峠が廃道に この頃から大手木材会社(東谷:興国人綱・千頭木材・木原造林、西谷:王子製紙・木原造林)がバレル材として原生林伐採(約10年で伐りつくす)	小倉強『東北の民家』、小倉強が「東北民家に関する一連の研究」で日本建築学会賞を受賞 この頃から民家調査が組織的に実施される
昭和31	1956	門入大火、25戸全焼	白川村大牧が鳩谷ダムで水没のため旧太田家を名古屋市東山動物園に移築 関西電力が豊中市に白川郷・旧大井家住宅を寄贈、日本民家集落博物館に移築 神奈川県で横浜国立大学による民家調査 この頃、大阪府で大阪市立大学が民家調査 この頃から民家が系統的に文化財指定されるようになる
昭和32	1957	揖斐川上流域が電源開発調査区域に指定 横山ダム着工 11月:村議会で徳山ダム建設反対を決議	白川村・御母衣ダム着工 白川村・御母衣第一発電所 伊藤鄭爾・二川幸夫『日本の民家』1～10
昭和33	1958	4/1:徳山中学校が徳山小学校より独立 岐阜乗合バス(根尾村樽見で乗り継ぎ、岐阜まで所要3時間)の定期運行開始、1日3回 徳山小中学校(中学校は併設校)から徳山中学校が独立、分校を廃止	大岡実他『神奈川県における近世民家の変遷』1
昭和34	1959	5月:徳山中学校清心寮を開設 9/26:伊勢湾台風による水害で孤立化、復旧工事による日雇い労働が導入される	白川村・御母衣ダム水没地から旧若山家住宅を高山市に移築、飛騨民俗館として開館(1998:飛騨民俗館へ再移築) 長野県で東京大学が民家調査 東京大学建築史研究室が秋田郷の民家調査 湖北地方民家調査
昭和30年代半ば			この頃白川村内に200棟の合掌造り
昭和30年代後半			白川村木谷で合掌造り民家7軒中6軒を非合掌造りに立て替え 集落解体が進む
昭和35	1960	県統計によれば、この頃、人口が最多(2294人)	三溪園に白川郷から矢原原家住宅を移築 伊藤鄭爾が『日本民家史の研究』で日本建築学会賞受賞 大阪・日本民家集落博物館 浅野清他『大阪府の民家』 城戸久らが三河地方民家調査 日本建築学会民家小委員会「民家調査基準」1 この頃農林業センサスから焼畑の項目がなくなる
昭和36	1961	農村電化促進法を適用、国・県・村・中部電力の資金で本格送電が決まる	白川村・御母衣ダム第二発電所 野村孝文『南西諸島の民家』
昭和37	1962	下開田に村初の簡易水道が完成 奥村三雄が戸入の孤立方言について学会報告 岐阜県教育委員会が揖斐川上流域総合学術調査 徳山小学校(本校)で完全給食 下開田(漆原)春日神社拝殿を改修して保育所を開設、4～11月の季節保育	辺地法 日本建築協会『ふるさとのすまい』
昭和38	1963	三八豪雪 3/30:戸入に簡易水道導入、11/10:山手、12/15:上開田 5/27:徳山電気組合が自家発電を廃止、中部電力が完全送電 7/24:本郷・上開田・下開田で徳山テレビ共同受信施設組合、10/27:テレビ受信開始 7/25:本郷・上開田・下開田で中電初点灯、8/14:戸入、15:門入 この頃まで製炭が続けられる	置県百年記念事業として岐阜県史編纂(～1973) 飛騨郷土館(のち下呂温泉合掌村) 白川村・荻町合掌造保存会 大岡実他『神奈川県における近世民家の変遷』2 二川幸夫写真・伊藤ていじ解説『民家は生きてきた』
昭和39	1964	6月:横山ダム完成、藤橋村親・鬼姫生が水没、水没により西横山発電所が停止 3/15:塚に簡易水道	広域市町村圏振興整備措置

南本 有紀

	徳山村と周辺のできごと	文化財・民俗学・建築史・山村振興のできごと	
昭和40年代		集落再編成事業で行政による集落の消滅、自発的な無人化・離村が発生	
昭和40～50年代		民家の文化財指定が集中	
昭和40	1965 9/15:集中豪雨で徳山小学校本校舎が全壊、以降災害復旧工事が主産業に 榎原分校で給食開始 この頃、プロパンガスが普及、炭から転換(燃料革命) これ以降、村外産院などでの産出が増える	岐阜県教育委員会が民謡・民謡調査 山村振興法 愛知・博物館明治村 伊藤ていじ『日本の美術』21民家 文化財保護法制定(1950)以来、この年までに26件が文化財指定、これ以降民家の指定が増える(1966～80・269件) 岩手・旧菅野家住宅(享保5・1720築)を重要文化財に指定 この年までの重要文化財指定・民家は43棟	
昭和41	1966	文化庁補助事業・民家緊急調査(～1977)、民家の文化財指定が本格化 『京都府の民家調査報告』1	
昭和42	1967	天理参考館に白川村・合掌造り民家を移築(2000:白川村に返還) 神奈川・川崎市立日本民家園 石川・江戸村(～1998,2010:移転して金沢湯涌江戸村) 太田博太郎他『民家のみかた調べ方』	
昭和44	1969	岐阜大学教育学部郷土資料「損斐郡徳山村方言」 村議会が県にダム建設早期決着を陳情、徳山ダム対策連絡協議会を結成 11月:村史編集発起人会を開催、運営委員会・村史編集委員会(徳山小中学校教員からなる)発足	民家緊急調査報告書を刊行、6件16棟が重要文化財指定 白川村・野外博物館合掌造り民家園に9棟の合掌造りを移築(～1971)
昭和40年代半ば		この頃白川村内に140棟の合掌造り	
1970年代		この頃から古民家の再生・移築が盛んに	
昭和45	1970	この頃の人口は約1600人 この頃までに大手製紙企業がバルブ用材を皆伐	飛騨民俗村に11棟の民家を移築(～1971) 川崎市立日本民家園への福島市・旧鈴木家住宅移築をきっかけに、福島市民家園が構想される 過疎法 この頃から文化財保護法による文化財民家の修理が急増
昭和46	1971	徳山ダム建設事業開始、ダム建設実施計画の調査立ち入りを認め、全村90%余の調査完了 岐阜県教育委員会が徳山村民俗資料緊急調査(～1972)、『岐阜県の民家 岐阜県民家緊急調査報告書』刊行 宗教分布調査によると405戸のうち誠照寺派239戸、増徳寺74戸	飛騨民俗村 白川郷荻町集落の自然環境を守る会 吉田靖『日本の美術』60民家 朝日民家シンポジウム『日本の民家 その形成過程』 石川県立郷土資料館が白山麓民俗資料緊急調査を実施(～1972) 集落再編成事業(～1976)で119集落・922戸が移転、過疎地域の廃村が増加 この年度から「民家等買上げ」予算を国庫補助金に計上
昭和47	1972	昭和47年7月豪雨 徳山ダム立ち入り調査、工事中(1977完成予定) 懸賞金付きツチノコ(ヨコツチ)探しイベントを実施	白川郷合掌村(のち野外博物館合掌造り民家園) 富城県総合博物館民家園 石原憲治『日本農民建築』1～9 復刻 文化財建造物保存技術協会設立
昭和48	1973	水資源開発促進法により徳山ダム建設を公示 3月:民俗資料緊急調査報告を刊行 5月:徳山村史刊行	岩手・北上市立博物館・みちのく民俗村 川島宙次『滅びゆく民家』1～3(～1976)
昭和49	1974		全国文化財集落施設協議会 奈良県立民俗博物館
昭和50	1975		奈良国立文化財研究所(のち奈良文化財研究所)『高山一町並調査報告』 鈴木充『日本の美術』37民家 柳田国男生誕100年 文化財保護法改正で建造物が土地を含めて指定可に、集落町並みを指定する伝統的建造物群保存地区制度を新設
昭和51	1976	徳山ダム事業認可、事業を建設省から水資源開発公団(のち水資源機構)に継承	香川・四国民家博物館(四国村)
昭和52	1977	谷汲の民家を大野町・陽勝寺に移築	民家緊急調査報告書を刊行(2回目)、5件5棟が重要文化財指定 文化庁・民家緊急調査が終了(1966～)、この年までに民家主屋285棟・付属屋合せて495棟を重要文化財指定 国重要統的建造物群保存地区に6地区を選定 重要文化財・箱木家住宅(兵庫)ダム水没のため移築(～1979) 石川県立白山ろく民俗資料館(準備中)に尾田家・小倉家(国指定重要文化財)を移築復元
昭和53	1978	岐阜児童文学研究会・民話研究のつどい(中京女子大学ら)が民話わらべ歌調査(～1983) 『岐阜県の民家 昭和52年度版民家緊急調査報告書』、戸入・橋場家・塚・森下家を所載 9月:水資源開発公団から家屋移転の補償基準を提示(第一次損失補償基準)	石川県立白山ろく民俗資料館の尾田家「白峰の作り民家と生活用具」「白峰の作り生活の用具」を国重要有形民俗文化財に指定
昭和54	1979		石川県立白山ろく民俗資料館 この年までに民家主屋297棟・付属屋合せて530棟を重要文化財指定
昭和55	1980	桑田勲・岐阜女子大学が戸入民家調査 徳山連絡所いずみ屋(岐阜市)が廃業 4月:水資源開発公団が第二次損失補償基準を提示 この頃の人口は約1300人	重要文化財指定の民家が300棟を超える(指定は一段落)
昭和56	1981		学研『日本の民家』1～8 林野全孝が「論著『近畿の民家』など一連の民家研究」で日本建築学会賞受賞
昭和57	1982	藤橋村・杉原ダム建設による移転開始、東西杉原から古民家5棟を藤橋村歴史民俗資料館に移築 増山たづ子『故郷:私の徳山村写真日記』、最初の写真集を出版 1月:徳山村の歴史を語る会機関誌『ゆるえ』創刊	野外博物館合掌造り民家園に6棟を移築 福島市民家園
昭和58	1983	岐阜県教育委員会が民謡調査 桑田勲・岐阜女子大学が戸入民家調査 1月:映画「ふるさと」(神山征二郎監督) 8月:第1回徳山の自然と歴史と文化を語る集い(徳山村三二学会) 10月:水資源開発公団が第三次損失補償基準を提示 11月:ダム補償基準妥結協定し海抜400m等高線以下水没が確定、これ以降離村・移住へ	北海道開拓の村 建築士学会発足、『建築史学』発刊 小寺武久『名宝日本の美術』25民家と町並

旧徳山村年表 旧徳山村民家（旧宮川家住宅主屋）移築経緯に関連して

	徳山村と周辺のできごと	文化財・民俗学・建築史・山村振興等のできごと
昭和59 1984	<p>徳山村民俗資料保存対策準備会、徳山村文化財保存対策協議会が発足</p> <p>徳山村文化財対策協議会が民具を収集開始</p> <p>「広報とく山」75号(8月)で民具収集を呼びかけ</p> <p>増山たづ子がエイボン功績賞を受賞</p> <p>徳山村の歴史を語る会「徳山村のあけぼのを求めて：岐阜県揖斐郡徳山村遺跡分布調査中間報告」展</p> <p>3月：補償の個人契約開始、契約済み村民の離村が始まる</p> <p>7月：民話わらべ歌調査(第二次)</p> <p>7月：藤橋村歴史民俗資料館(移築民家)仮オープン</p> <p>8月：第2回徳山の自然と歴史と文化を語る集い(徳山村ミニ学会)</p> <p>8月：最後のオマワリ様</p> <p>8/23：門入で家屋の解体が始まる</p> <p>9/22：下開田で離村が始まる</p> <p>9月：県文化財保護センターが埋蔵文化財調査(～1985・3)</p> <p>10～11月：小川泰他が戸入民家調査</p> <p>11月：上開田・山崎家を解体、大野町・陽勝寺へ移築</p> <p>この年11月から、離村が本格化し、家屋の解体が進み、建物移築が増加</p> <p>この頃から村役場に民家移築の照会が入り、移築を斡旋</p>	<p>『山村海村民俗の研究』：「山村生活調査第1回報告書」他の復刊</p>
昭和60 1985	<p>3月：岐阜県教育委員会『揖斐川上流域徳山ダム・杉原ダム水没地区 埋蔵文化財分布調査報告書』</p> <p>7/6：増山たづ子が岐阜市に引っ越し、増山家は岐阜市に寄贈(のち岐阜ファミリーパークに移築)、7/13：増山家土蔵取り壊し、7/23頃：増山家解体</p> <p>7月末までに186戸取り壊し</p> <p>8/21までに約200戸を取り壊し、7割(470戸中約200戸)が離村</p> <p>8/24-25：第3回徳山の自然と歴史と文化を語る集い(徳山村ミニ学会)で博物館構想を発表</p> <p>8/25：第25回社会教育研究会全国集会・第17分科会「暮らしに生きる博物館」で徳山村博物館構想を発表</p> <p>8月初め：増山家を解体、8月中旬～9月上旬：岐阜ファミリーパークの基礎工事、9月中旬～：移築(12/20完成予定)</p> <p>9/30：徳山地区墓地移転合同報告会</p> <p>10月：戸入・六社神社社殿を福井県朝日町・八幡神社へ移築</p> <p>10月：増山たづ子『ふるさとの転居通知』</p> <p>11/17：陽勝寺に上開田・山崎家(家道場)を移築</p> <p>12月：戸入・神足家を本巣に移築(建前)(～1986・3完成)</p> <p>12/16：揖斐郡町村会が広域合併が困難と結論、県主導で藤橋村合併へ</p> <p>12/24：岐阜ファミリーパークの増山家移築完了</p> <p>この年から冬季、戸入は無人に</p>	<p>福井市おきこえ民家園第1期工事、3棟を移築</p> <p>日本建築学会民家語彙集録部会『日本民家語彙集解』</p> <p>11月：久瀬村民俗資料館開館</p>
昭和61 1986	<p>1月：廢村により本郷白山神社の元服式が中断</p> <p>2月：徳山村廃置分合問題が藤橋村との合併で決着</p> <p>2/2-28：美濃あけぼのの会が大垣共立銀行長良支店で岐阜市歴史博物館蔵の徳山村の木挽き道具を展示</p> <p>2/13：岐阜県教育委員会が徳山村文化遺産保存事業計画(4月～：埋文調査、民家(旧宮川家)移築、自然・生活環境調査、古文書収集・記録保存)を発表</p> <p>4月～：岐阜ファミリーパーク・増山家公開</p> <p>4/23-6/8：岐阜県博物館「徳山の四季とくらし」に18,978人が来場</p> <p>8月：文化財保存対策協議会を設置</p> <p>8月：第4回徳山の自然と歴史と文化を語る集い(徳山村ミニ学会)、徳山村での最後の開催</p> <p>10/10体育の日：徳山中学校運動場で徳山村解散式(お別れ運動会)</p> <p>10～11月：写真展「増山たづ子写真日記 ありがとう徳山村」を東京・名古屋・岐阜で開催</p> <p>11/23：本巣市歴史民俗資料館(旧神足家)開館</p>	<p>千葉県立房総のむら</p> <p>大河直躬『住まいの人類学 日本庶民住居再考』</p>
昭和62 1987	<p>収集民具1万点中6千点が「徳山の山村生産用具」国重要有形民俗文化財指定、2/17：文化財審議会答申、3/3：官報告示</p> <p>3月：徳山村教育委員会『徳山の山村生産用具 概説・自録編』『同 実測図編』</p> <p>3/27：徳山中学校で閉村式</p> <p>3/31：徳山村廃村、藤橋村に編入合併(約430人・旧徳山村人口は103人)</p> <p>3/31の閉村までに村仲介で民家32軒を村外へ移築</p> <p>6/14：愛知県西尾市で戸入より移築民家(無の里休憩所)のふれあいの集い、6月中旬着工、8月末完了見込み</p> <p>7月：増山たづ子「ありがとう徳山村、岐阜県美術館で「ありがとう徳山村 増山たづ子写真展」</p> <p>7月：揖斐川町歴史民俗資料館に2棟移築予定</p> <p>8/29-30：第5回揖斐谷の自然と歴史と文化を語る集い(揖斐谷ミニ学会)、藤橋村で開催</p> <p>秋：戸入の9棟、修善寺町へ移築完了</p> <p>10/7：旧宮川家の移築完了、公開開始</p> <p>10/25：8集落・8社を合祀して徳山神社を創建</p> <p>～10/28：名古屋・西友高針店で「サヨナラ徳山村 フォト&トーク」</p> <p>藤橋村歴史民俗資料館に杉原より5棟移築</p>	<p>四国民家博物館が「四国民家博物館における民俗文化財保存の業績」で日本建築学会賞受賞</p> <p>東京・府中市郷土の森博物館</p>
昭和63 1988	<p>戸入・岩菅家を解体して関市・中池総合運動公園に移築</p> <p>門入八幡神社社殿を福井県鯖江市・松泉神社へ移築</p> <p>個人対公団ダム建設所との転移補償契約がほぼ完了</p> <p>～2/16：岐阜市・西濃信用金庫福光支店で「徳山の遊び展」</p> <p>8/27-28：第6回揖斐谷の自然と歴史と文化を語る集い(揖斐谷ミニ学会)</p> <p>10/13-11/27：京都府立山城郷土資料館「山村のくらし」で徳山村資料を展示</p>	<p>10/11-11/13：大阪市立博物館「山に生きた人びと その衣食住と生業」で飛騨地方の資料(飛騨民俗村収蔵品)を展示</p>
昭和63～平成1 1988-89		<p>ふるさと創生事業</p>
昭和64/平成1 1989	<p>3月：全戸の移転が完了</p> <p>8/26-27：第7回揖斐谷の自然と歴史と文化を語る集い(揖斐谷ミニ学会)</p> <p>10/14：藤橋村歴史民俗資料館・移築民家で県政夢おこしガヤガヤ会議</p>	<p>福井市おきこえ民家園、第2期工事で3棟を移築して開園</p> <p>宮城・国営みちのく社の湖畔公園(みちのく公園)</p> <p>宮澤智士『日本列島民家史』</p> <p>安藤邦廣『茅葺きの民俗学』</p>
平成2 1990	<p>1/7：1986以来中絶していた本郷白山神社の元服式・徳山神楽を岐阜市歴史博物館で再現</p> <p>1/15：本郷白山神社の元服式・徳山神楽を徳山神社で復活</p> <p>8/18-19：第8回揖斐谷の自然と歴史と文化を語る集い(揖斐谷ミニ学会)</p> <p>横浜ダム再開発事業開始、ダム湖浚渫など、当初1982完成が1997に延期(のち2011に再延期)</p>	<p>『日本の美術』民家と町並 286東北・北海道、287関東・中部、288近畿、289中国・四国、290九州・沖縄</p> <p>降幡廣氏が「民家再生の新しい方法論を確立するに至った多年の業績」で日本建築学会業績賞を受賞</p>

南本 有紀

	徳山村と周辺のできごと	文化財・民俗学・建築史・山村振興のできごと
1990～2000年代		古民家再生ブーム
平成3 1991	8/17-18:第9回捐斐谷の自然と歴史と文化を語る集い(捐斐谷ミニ学会)	『民俗建築』100号
平成4 1992	8/22-23:第10回捐斐谷の自然と歴史と文化を語る集い(捐斐谷ミニ学会) 12月:水資源開発公団徳山ダム建設所が旧徳山村民対象に「徳山だより」発刊 旧住民対象に徳山ダム工事見学会、以後、毎年実施 閉村5年、通年居住者はおらず、旧徳山村に住民票があるのは32人	草野和夫が「著書『東北民家史研究』に集大成された一連の民家史研究」で日本建築学会賞を受賞
平成5 1993	8/21-22:第11回捐斐谷の自然と歴史と文化を語る集い(捐斐谷ミニ学会) 11月:捐斐谷の自然と歴史と文化を語る集い(捐斐谷ミニ学会)が捐斐郡B大賞受賞、 捐斐地域の活性化に寄与	江戸東京たてもの園(前身は武蔵野郷土館) 建築修復学会
平成6 1994	8/20-21:第12回捐斐谷の自然と歴史と文化を語る集い(捐斐谷ミニ学会) 3月:最後まで残っていた本郷・共有林の買収交渉が概ね合意、これによりダム完成は 2002見込みに	富山博『日本民家調査研究文献総覧』 川崎市立日本民家園が「日本民家園における近世民家の体系的収集保存、公開と環境 整備」で日本建築学会賞を受賞
平成7 1995	建設省(のち国土交通省)がダム等事業審議委員会を設置、中部圏では徳山ダム・矢作 川河口堰が見直し対象事業に 8/19-20:第13回捐斐谷の自然と歴史と文化を語る集い(捐斐谷ミニ学会)	民家語彙集録グループ代表草野和夫が「民家語彙の集録とその解説に関する一連の 業績」で日本建築学会賞を受賞
平成8 1996	6月:岐阜県博物館で「徳山のくらし体験 地獄うどんを食べよう」を初開催 8/24-25:第14回捐斐谷の自然と歴史と文化を語る集い(捐斐谷ミニ学会)	文化財保護法改正で文化財登録制度を新設、対象は建造物
平成9 1997		日本民家再生リサイクル協会(のち日本民家再生協会) 日本民家集落博物館で山村サミット、白川村が参加
平成10 1998		旧八百津発電所施設を重要文化財に指定 第1回民家フォーラム(日本民家再生リサイクル協会)
平成11 1999		福島・いわき市暮らしの伝承館 岡山・古民家再生工房が「古民家再生工房」の継続的な活動」で日本建築学会業績賞を受賞 平成の大合併(～2010)
平成12 2000	徳山ダム本体工事	『日本の美術』406離島の建築
平成13 2001	岐阜県博物館「わたしの徳山 増山たづ子故郷の記録」(～2002)	全国茅葺き民家調査(農水省)、調査対象120市町村(～2003・3)
平成14 2002	徳山ダム共用予定(1994当初)	兵庫県でヘリテージマネージャー(兵庫県歴史文化遺産活用推進員)制度発足
平成15 2003	徳山民俗資料収蔵庫が開館	旧江戸村から金沢湯涌江戸村に再移築(～2010:開村)
平成16 2004		文化財保護法改正により文化財登録制度に建造物以外の有形文化財を追加
平成17 2005	1/31:捐斐谷谷汲村・久瀬村・春日村・坂内村・藤橋村を捐斐川町に編入合併 旧八百津発電所施設を文化庁・近代化遺産に追加認定	大阪府登録文化財所有者の会発足、以後、京都・愛知・和歌山・秋田・東京で所有者の会 が設立される
平成18 2006	徳山ダム本体盛り立て完了 3/7:増山たづ子没 9/22:国道417号付替工事、徳山バイパス開通 9/25:徳山ダム試験湛水 7/15-9/3:岐阜県博物館で水資源機構徳山ダム建設所・岐阜県文化財保護センターが 「縄文人ってなかなかすごい!! わくわく徳山縄文ワールド」	
平成19 2007	岐阜県博物館「心の宝、ふるさと徳山 増山たづ子写真展」 経済産業省・近代化産業遺産群33に捐斐川の水力発電関連遺産(東横山発電所・広瀬 発電所・川上発電所)を認定	
平成20 2008	10/13:徳山ダム完成	蒲島郁夫熊本県知事が「ダムに頼らない治水」表明、川辺川ダム建設を白紙撤回
平成21 2009		「コンクリートから人へ」を標榜した民主党政権が川辺川ダム建設事業を休止
平成23 2011	横山ダム再開事業完了	
平成24 2012	本県市で自家消費用に栽培されていた徳山唐辛子を発見、特産化に取り組む(2018 ～:JA直売所で販売) 広瀬発電所改修工事竣工	
平成25 2013	脇田雅彦没 静岡県・IZU PHOTO MUSEUM「増山たづ子 すべて写真になる日まで」	大阪府でヘリテージマネージャー育成講座開始
平成26 2014	10/19:徳山村移転30年ふれあいまつり(本県市役所)	岐阜県が県単小水力発電施設整備事業を開始
平成27 2015	8/26-9/27:photographers' gallery「増山たづ子 ミナシマイのあとに」	11月:登録有形文化財の総数が1万件を超える
平成28 2016	5/24-2016/6/19:仙台アーティストランプレイス「増山たづ子と東北の記録者たち」	
平成29 2017	徳山村閉村30周年 岐阜県博物館移動展「見つめる目 写真家の見た飛騨美濃～細江光洋の飛騨・増山たづ 子の徳山・後藤英夫の円空～」(高山市・飛騨高山まちの博物館) 捐斐川町小津・下辻南清流発電所、坂内・諸家清流発電所が操業開始	
平成30 2018	徳山ダム10周年 11/2:旧宮川家住宅主屋が国登録有形文化財(建造物)に登録	
平成31/令和1 2019	本県市・JAぎふが徳山とうがらし連絡協議会を結成	
令和2 2020	岐阜県博物館「国登録有形文化財(建造物)旧宮川家住宅主屋保存活用計画」	令和2年7月豪雨で熊本県球磨川水系・川辺川で洪水発生、11月に流水型ダム建設を国 に要望、多目的ダムから流域治水に方針変更
令和3 2021	1/15:大牧富士夫没	

※ 文末の文献リストを元に作成

※ 表中は敬称略

※ 徳山村と周辺は、編入合併される藤橋村・捐斐川町を指す

※ 現在名称を略した組織・機関がある

岐阜県関市で見つかったヒナコウモリ *Vespertilio sinensis* について

説田健一

Asian parti-colored bat *Vespertilio sinensis* found in Seki, Gifu Prefecture

SETSUDA Ken-ichi

要旨 令和2年(2020)4月24日、岐阜県関市小屋名百年公園内でヒナコウモリを拾得した。体重が少ないことから、生息地間を移動中に衰弱し死亡したものと考えられる。

はじめに

ヒナコウモリ *Vespertilio sinensis* はヒナコウモリ科に属し、アジア東部に広く分布し、国内では、北海道から九州にかけて生息する(Fukui, 2009)。もともと、本種は森林性で、ねぐらは大木の樹洞と考えられていたが(前田, 2002)、近年、鉄道や道路の橋げたや高架などで見つかることが多い(例えば、重昆ら, 2013; 大沢ら, 2014; 安井ら, 2016)。岐阜県では、これまでに、大野郡白川村、飛騨市、高山市、下呂市、岐阜市で記録され

ているが(長野, 2018; 山本, 2004, 2015, 2020; 山本・伊藤・梶浦, 2012)、関市では見つかっていない。令和2年(2020)4月24日、関市小屋名百年公園内の駐車場で、本種のへい死体を拾得したので、計測値とともに報告する。

発見の状況と記載

当館職員が、2020年4月24日午前、関市小屋名百年公園内の岐阜県博物館職員駐車場で拾得した。標本は岐



図1. 岐阜県関市小屋名百年公園内で拾得されたヒナコウモリの仮剥製 (GPM-Z-34276)

岐阜博物館のサポーターグループ「ダチョウ組」が作製した(図1)。本標本の登録番号, 性別, および各計測値は下記のとおりである。

ヒナコウモリ *Vespertilio sinensis*

登録番号 GPM-Z-34276

性別 メス

全長 70mm 前腕長 49mm 下腿長 19mm

耳介長 14mm 体重 13g

考察

冬眠中のヒナコウモリの体重は, 自然状態に近い飼育施設の中で, 平均 27g から 19g に減少することが知られている(Fukui, 2009)。今回, 関市で拾得された個体は 13g であった。本種は出産保育地と越冬地などの生息地間を移動し, なかには, 長距離の移動(例えば, 京都から宮城)を行うものがある(佐藤ら, 2017)。これらのことから, 当該個体は越冬地から移動する途上で衰弱し, 死亡したものと考えられる。

謝辞

ヒナコウモリにかかわる文献をご教示いただいた岐阜県立土岐紅陵高等学校の山本輝正氏, 標本製作にご協力いただいた岐阜県博物館サポーターグループ「ダチョウ組」のみなさまに感謝を申し上げます。

文献

- Fukui, D., 2009, *Vespertilio sinensis*. The Wild Mammals of Japan, 91-92.
- 重昆達也・大沢夕志・大沢啓子・峰下耕・清水孝頼・向山満, 2013. 群馬県の新幹線高架橋で見つかったヒナコウモリ *Vespertilio sinensis* の出産哺育コロニーおよび冬季集団. 群馬県立自然史博物館研究報告, 17: 131-146.
- 前田喜四雄, 1991, 岐阜県下のコウモリ類(15)尾上郷国有林(1). 岐阜ふるさとと動物通信, 39: 629.
- 前田喜四雄, 2002, ヒナコウモリ, 改訂版・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—1 哺乳類. 環境省自然環境局野生生物課. 東京. p.110-111.

- 長野浩文, 2018, 岐阜市の市街地の高架橋で発見されたヒナコウモリ集団. コウモリ通信, 23(1): 15-16.
- 大沢啓子・佐藤顕義・勝田節子・大沢夕志, 2014, 埼玉県の新幹線高架におけるヒナコウモリ *Vespertilio sinensis* の越冬期と出産哺育期の分布. 埼玉県立自然の博物館研究報告, 8: 49-52.
- 佐藤顕義・高橋修・秋葉保夫・峰下耕・佐々木玲子・作山宗樹, 2017, 標識調査で明らかとなった東北地方におけるヒナコウモリ *Vespertilio sinensis* の生存期間と長距離移動. 森林野生動物研究会誌, 42: 37-44.
- 山本輝正, 2004, 岐阜県白川村大窪池周辺のコウモリ相, 岐阜県高等学校教育研究会生物教育研究部会誌, 生物教育 49: 27-31.
- 山本輝正, 2015, 御嶽山麓周辺のコウモリ相. 森林野生動物研究会誌, 40: 21-28.
- 山本輝正, 2020, 岐阜県飛騨地方の深洞湿原・深洞原生林のコウモリ相. 森林野生動物研究会誌, 45: 19-22.
- 山本輝正・伊藤圭子・梶浦敬一, 2012, 岐阜市の民家をめぐらしていたヤマコウモリ. コウモリ通信, 19(1): 2-6.
- 安井さち子・重昆達也・吉倉智子・斉藤理, 2016, 栃木県那須塩原市の新幹線高架橋でみつかったヒナコウモリ *Vespertilio sinensis* の哺育集団. 那須野が原博物館紀要, 12(1): 1-6.

令和2年7月豪雨で被災した押し葉標本のレスキュー活動

土屋 寿美

Salvage of Botanical Specimens Damaged by the River flood on the 2020 Heavy Rains

TSUCHIYA Toshimi

要旨 令和2年7月豪雨により浸水被害にあった植物標本について、岐阜県博物館でも標本修復の協力を行った。こうした被災した標本の修復についての情報は少ないため、その方法についてまとめ、報告書を作成した。今回の修復では、植物標本の損傷状態を被災汚損レベルに応じて整理することにより、効率的に修復することができた。こうした記録を植物標本の保全に役立てることができるようにした。

はじめに

令和2年(2020)7月豪雨により熊本県の球磨川が氾濫し、人吉城歴史館(熊本県人吉市)が浸水した。同館が所蔵する「前原勘次郎植物標本」約3万点が被災した。乾燥、クリーニングをしなければ、腐敗やカビの発生によって標本の価値が損なわれる恐れがあるため、熊本県や熊本県博物館ネットワークセンターが、学芸員のメーリングリストなどを通じて全国の博物館などに修復への協力を求めた。岐阜県博物館は、貴重な標本の保存・修復に協力すべく、7月の九州豪雨で被災した植物標本のレスキュー活動に乗り出した。全国およそ30の博物館や研究所などと協力し、貴重な自然史資料を保存していくため、標本の修復の支援を行った。今後、被災した標本のレスキューの参考になるよう、本活動の内容について記録及び報告する。

レスキュー活動の概要

被災時、人吉城歴史館の標本庫は天井近くまで浸水し、所蔵する「前原勘次郎植物標本」の多くが泥水による浸水被害にあった。これらの標本は、図1のように新聞紙に挟んだ状態で1-4の標本が1つのビニールの袋に入れて保管されていた。標本の被害は、汚損が軽微なものもあれば、ビニールの袋の中まで水が入り、泥水が中にたまってカビや細菌が広がってしまっている状態のものもあった。これらの標本をレスキューするにあたり、まず被災汚損レベルを表1のように分け、状態に応じて修復作業を行った。



図1 泥水により汚損した熊本被災資料(植物標本)

表1 標本の被災汚損レベル

被災汚損レベル	状態	修復作業の内容
I 軽微	標本及び台紙への浸水被害はほぼなし	乾燥
II 軽度	台紙への浸水はあるが、標本への浸水被害はない	乾燥、場合によっては泥の除去
III 中度	台紙及び標本に浸水被害あり	水に浸して泥の除去後、乾燥
IV 重度	台紙及び標本に泥、浸水被害あり	止水中にて泥の除去後、乾燥
V 重大	泥水により、台紙及び標本の被害甚大	止水中にて泥の除去後、細部の泥を除去乾燥後、場合によっては台紙の貼替

※多くの標本でカビが発生していたため、約70%エタノールによる殺菌・除去を行った

修復作業

小川(2012)、佐久間(2011)や全国の植物学芸員のメーリングで共有した情報を参考に修復作業を行った。今回の修復作業は、7/14~9/1の間に、ボランティアも含め10(のべ24)名で行った。なお、イネ科、ウラボシ科、シダ科、カヤツリグサ科の植物標本184点の修復処置を行った。

(1) 状態確認

標本は1つずつ状態を確認し、被災汚損レベルを5段階に分け、それぞれの状態にあった修復処置を行った。なお、標本1枚の修復処置にかかった時間は、被災汚損レベルI及びIIで10分程度、被災汚損レベルIII及びIVで30分程度、被災汚損レベルVで30分以上であった。

(2) 洗浄・修復

① 被災汚損レベル I (図 2)

- ・浸水被害はまばならない。
- 標本を台紙ごと乾燥。
- ・カビ発生はほとんどないか軽微である。



図 2 被災汚損レベル I にある植物標本の状態

② 被災汚損レベル II (図 3)

- ・わずかな浸水被害があり台紙が湿っている。
- 標本を台紙ごと乾燥。泥が台紙の端に付着していることがあり、その場合は泥を除去したのちに乾燥。
- ・カビの発生は軽微で、場合によっては水に湿った部分に若干広がっている。



図 3 被災汚損レベル II にある植物標本の状態

③ 被災汚損レベル III (図 4)

- ・標本と台紙がほとんど湿っている。
- 標本を台紙から外さず、表面を中心にクリーニングして乾燥。下の標本の張り付きやカビの発生が見られる場合は表裏をクリーニングして乾燥。
- ・カビの発生は標本周辺に多く見られる。



図 4 被災汚損レベル III にある植物標本の状態

④ 被災汚損レベル IV (図 5)

- ・台紙と標本が激しく湿っており、泥が多く付着している。
- 標本を台紙から外さず、表裏をクリーニングして乾燥。下の標本の張り付きや標本の下にカビの発生や泥の付着が見られる場合は、台紙から標本を外してクリーニングし、乾燥。
- ・カビの発生は標本周辺を中心に台紙全体に広がっている。



図 5 被災汚損レベル IV にある植物標本の状態

⑤ 被災汚損レベル V (図 6)

- ・台紙や標本が濡れており、新聞紙に粘着する。
- 台紙から外すことが可能な場合、台紙から外してクリーニングし、標本と台紙を別々に乾燥。台紙から標本を外すことが不可能な場合、クリーニングに耐えられる強度がある標本は、台紙上で表面のみクリーニングし、乾燥。クリーニングに耐えられない標本は、台紙上でのアルコールの噴霧と化粧筆による表面の軽いクリーニングを行い、台紙ごと乾燥。
- ・多量のカビの発生と細菌の発生が認められる。

※挟み紙として使用されている新聞紙は、歴史的にも貴重な資料となりうるものもあるため、基本的に保存できるように修復の対象とした。しかし、状態によって保存が難しいものもあるため、それぞれのケースに応じて、標本台紙と一緒に乾燥するかどうかや保存または廃棄するかを判断した。

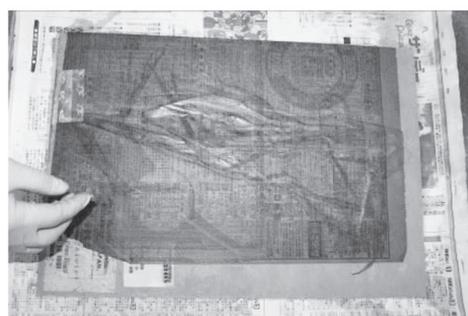


図 6 被災汚損レベル V にある植物標本の状態

(3) 洗浄およびカビ除去・殺菌に使用した道具 (図7)

- ・ピンセット：洗浄の際に流れた植物体を扱ったり、標本の形を整えたりする。先の平たい切手用のピンセットだと植物体を傷めないのが良い。
- ・固めの筆：挟み紙と標本やラベルをはがす際や台紙のカビや泥の除去に使用する。
- ・柔らかめの筆：クリーニングに耐えられる標本の植物体についたカビや泥の除去に使用する。
- ・化粧筆：被災汚損レベル IV やクリーニングに耐えがたい標本のカビ除去・殺菌に使用する。
- ・化粧用コットン：クリーニングに耐えられる標本に発生したカビの除去に使用する。
- ・蓋つきペトリ皿：カビ除去・殺菌用エタノールの小分けに使用すると作業がしやすい。
- ・洗浄瓶：クリーニングに耐えがたいものにエタノールを散布する。
- ・ゴム手袋、マスク、白衣：感染症予防のため装着する。



図7 左：カビ除去・殺菌に使用した道具、右：筆は左から固め(4本)、柔らか目(3本)、化粧筆(4本)

(4) 標本のクリーニング

標本のクリーニングは、台紙、植物体、ラベルの3つについて行った。特に、標本の情報が記されているラベルと植物体は、情報が欠落しないように修復する必要があるため、慎重にクリーニングを行った。なお、挟み紙として使用していた新聞紙は、水による洗浄が可能なものは洗浄・乾燥を行い保存するようにした。

標本のラベルは、図8のように標本をいれるビニール袋の表面に貼り付けられていた。直接浸水や泥による被害を受けているものが多いため、記載してある情報が失われないよう、ビニールから切り離し、汚れの洗い流しをおこなった。



図8 標本を包んでいたビニールの袋に貼り付けられていたラベルとその洗浄

図9のように、標本を1つずつ剥がし、挟み紙をめくりながら、標本の汚損状況(浸水、泥、カビ、バクテリア)を確認した。



図9 挟み紙と標本の汚損の確認

標本のクリーニングは、止水中で台紙、ラベル、筆を使って標本についた泥を除去し(図10a)、小筆を使って、挟み紙に貼り付いた標本を丁寧に外した(図10b)。その後、洗浄した標本の水分をキッチンペーパーや新聞紙を使って吸い取った(図10c)。



図10 標本のクリーニングの様子

標本に直接貼り付けてあるラベルの修復は、上の台紙に貼り付くなどして破れてしまっていたものについて修復した(図11a)。泥によってラベルが汚れたものは止水中で筆を使って文字が消えないように軽くこすってクリーニングした(図11b)。泥やバクテリアによって上の台紙にラベルが貼り付いてしまったものは、ピンセットを使って丁寧にはがしてクリーニングし、台紙に貼り戻した(図11c)。



図11 標本に直接貼り付けてあるラベルの修復の様子

(5) カビの除去・殺菌

ほとんどの標本には、黒または青っぽくなったカビの発生が見られた(図12)。このカビは、ほとんどが *Trichoderma* (ツチアオカビ) であると考えられ¹⁾、人への病原性は知られていないが、大変湿った環境でよく検出され、土壌中や栽培シイタケの汚染カビとして知られているものである。その他、バクテリアによる被害を受けているものは、挟み紙と標本の貼り付きや、標本が溶けたように見られた。

約70%エタノールを使って、こうしたカビやバクテリアの除去や殺菌を以下のように行った。

- 1 約70%エタノールをカビのみられる箇所や標本の重なり合っている部分に散布する。
- 2 多量のカビが発生している場合は、エタノール散布ののち、化粧用コットンを押し当てるとともに、筆を使ってカビを除去する。
- 3 標本が被災汚損レベルIVの標本やクリーニングに耐えがたいものに関しては、エタノールの散布後、化粧筆を使って表面のカビの除去し、エタノールを浸透させた。
- 4 バクテリアの被害が進んで標本がもろくなったものやクリーニングに耐えられないものは、エタノールの散布を念入りに行った。



図12 化粧用コットンによるカビの除去(左)とコットンに付着したカビ(右)

柔らかい化粧筆の特性を生かし、標本を傷つけないようにならることで、表面のカビの除去を行った(図13)。また、植物体の下側に付着したカビは、エタノールを散布するとともに、筆先を滑り込ませるようにしながら除去・殺菌を行った。



図13 化粧用筆を用いたカビの除去・除菌の様子

エタノールが浸透しやすいように根の付近に洗浄瓶から散布するとともに、筆を使って標本を持ち上げて下部のカビ除去・殺菌を行った(図14)。



図14 クリーニングに耐えられない標本のカビの除去・殺菌の様子

(6) 乾燥(図15)

標本のクリーニング及びカビの除去・殺菌を行った標本は、乾燥した新聞紙に1枚ずつ挟み、段ボールでさらに挟み合わせた。作業した標本1束(約50標本)ごとにゴム紐を使って軽く縛り、熱風乾燥機にかけた。熱風乾燥機にかけた時間は、浸水被害の小さかった標本は1昼夜かけて乾燥させた。被害の大きかった標本は、台紙や標本を水に浸してクリーニングを行っており乾燥に時間がかかるため、状態に応じて3-4昼夜かけて乾燥させた。

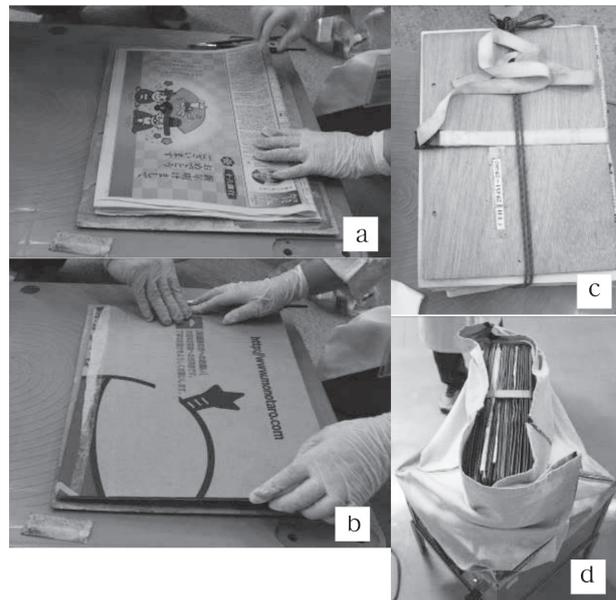


図15 クリーニングした標本を乾燥させる様子

a: 修復した標本を乾いた新聞紙で挟み込んだところ、b: 新聞紙で挟んだ標本を段ボールで挟み込んだところ、c: a、bを繰り返して束ねてベニヤ板で挟み、ゴム紐やベルトで縛って固定したところ(固定する際は、段ボールがつぶれないようにして、標本の間に風が流れるようにする)、d: 温風式乾燥機を使って乾燥したところ

(7) 補修・リスト化 (図16)

洗浄によって台紙から植物体やラベルが剥がれたものは台紙に貼り付けた。その際、固定の状態を確認し、植物体がずれないように補修も行った。なお、台紙の損傷が激しいものは、新しい台紙に貼り直すようにした。

補修まで終わった標本は、標本番号順に並べ、種ごとにリストを作成して管理できるようにした。



図16 標本の修復の様子

a : 標本の状態を確認しながら標本を台紙に貼り付けているところ、b : ラベルが剥がれたり、破れたりしているものを貼り付けなおしているところ、c : 標本番号の順に標本を整理したところ、d : 標本リストを作成できるように標本を種ごとに束ねたところ

(8) 燻蒸

雑菌を防ぐエタノール消毒だけでなく、虫による食害の可能性も考えられるため、処置が終わった標本すべてについて燻蒸処理(エキヒュームS)を行った。

終わりに

今回修復した「前原勘次郎植物標本」は、1917 から 1959 年の標本で、100 年以上前に作成されたものも多く含まれており、標本や包紙(新聞紙)は当時の様子を知る非常に価値の高いものばかりであった。文化財を預かる博物館として、地域の貴重な財産を収集、保存、継承してだけでなく、人類が地球上で豊かに生きていくために活動していくことが求められている。私たち学芸員は、今回のような有事の際には、人類の財産として、広く保全していかなければならないと考える。また、2001 年から GBIF (Global Biodiversity Information Facility : 地球規模生物多様性情報機構) が世界各地の様々な生物の分布情報や標本、調査・観察のデータ等を集積しており、日本でも JBIF (Japan Node of Global Biodiversity Information Facility : 地球規模生物多様性情報機構 日本ノード) が全国の植物標本を世界につないでいる。こうした人類の財産を守り、未来へと残していくことが博物館及び学芸員の使命だと考え、その方法等の情報を共有したい。

末尾ながら、貴重な情報を提供いただきました関係者及びレスキュー活動に協力いただきましたボランティアの皆様へ深謝申し上げます。また、被災された皆様へ心よりお見舞い申し上げます。

文献

文化財防災ネットワーク推進室, 2020, 文化財防災マニュアルハンドブック 被災自然史標本の処置例と減災対策. 文化財防災ネットワーク推進室, 東京, 32p.

船戸智, 2013, 陸前高田市立博物館の被災した押し葉標本レスキュー活動. 岐阜県博物館調査研究報告, 34, 45-46.

布施静香・山本伸子・高橋晃, 2011, 東日本大震災により被災した植物標本のレスキュー——兵庫県立人と自然の博物館が果たした役割—. 人と自然, 22, 53-60.

小川誠, 2012, 東日本大震災により被災した植物標本の修復. 徳島県立博物館研究報告, 22, 161-168.

佐久間大輔, 2011, 陸前高田市博物館の標本レスキュー. Nature Study, 57(7), 5-6.

鈴木まほろ, 2011, 陸前高田市博物館所蔵押し葉標本のレスキュー—. 全科協ニュース, 41(5), 1-3.

1) 佐久間大輔, 私信, 2020年6月.

(補注)

- 1 ここでは、便宜上徳川家康率いる勢力を東軍、石田三成らが率いる勢力を西軍とする。
 - 2 『愛知県史』資料編13織豊3(愛知県・二〇二二)以降、愛 資料番号で表記
 - 3 山本浩樹「関ヶ原合戦と尾張・美濃」(谷口央編『関ヶ原合戦の真相』高志書店・二〇一四)
 - 4 小野市立好古館編『播州小野藩一柳家史料由緒書』(小野市・一九九九)
 - 5 中村孝也編『徳川家康文書の研究』中巻(日本学術振興会・一九五九)五二三頁
 - 6 高柳光寿・松平年一『戦国人名辞典』(吉川弘文館・一九八二)
 - 7 渡辺世祐『稿本石田三成』(一九二九)
 - 8 『信濃史料』第一八巻(信濃史料刊行会・一九六二)、なおこの資料について白峰旬「慶長5年」8月21日付山村良勝・千村良重宛大久保長安書状」について「(別府大学紀要)・研究ノート二〇二〇」は示唆に富む逐条分析となっている。
 - 9 「山村道幽(勇)、犬山ニいままた御逗留」とあるが、(25)の記述や次の資料のように、関ヶ原合戦後も木曾谷代官の地位を認められていることから、石川に加勢したのではなく拘束されていたと考えるのが妥当である。
- 【資料】 木曾谷中代官之儀、被仰付候、并材木等之儀、
木曾川・飛騨河共、如石川備前仕候時可申付候、
慶長五年 大久保十兵衛
十月二日 (朱印) 奉之
- 山村道祐 (山村文書・『岐阜県史』史料編古代・中世四 同八号
以下岐同文書〇〇号と表記)
- 10 中村孝也編 前掲書 六一〇頁
 - 11 谷口央によれば、犬山在番衆は、美濃国に多く見られる永井直勝のルート、加藤貞泰ルート、石川光吉の田中清六ルートの三つのルートにより家康との交渉を進めたとする。「関ヶ原の戦いと美濃―徳川家康の視点から―」(『関ヶ原―天下分け目の合戦と美濃―』岐阜県博物館・二〇一七)
 - 12 この兄弟について、石川光元の可能性を挙げておく。家康の側室お亀の方(後の相応院)は、光元の元側室であり、この当時家康との間に仙千代(二五九五〜一六〇〇)と身ごもつた子(後の徳川義直)がいた。光元とお亀の間には、すでに石川光忠がおり、後年、徳川義直に付けられている。
 - 13 【資料2】の添状(岐「天洲加藤文書」二八号)の追而書きで、貞泰は取次の加藤太郎左衛門から「追而申候、此度之飛脚一段ぬるもの(＝機転の利かない者)ニて御座候間、重而八人を御多らび可被為申付候、以上」と叱責を受けたことに対応した、念入りな対応であろう。
 - 14 中村孝也編 前掲書 五四九・五六一頁

【資料18】の中で、犬山城の開城は人質の処刑が無かったためとの風説を伝えると共に、敵方の諸将の人質を十五人も処刑すれば、東軍諸将の気持ちもかわると、強い姿勢を求めている。

【資料18】

一 兔角如此延々と候ハ、味方中も心中難計御分別之前二候事、敵味方下々の取沙汰
 二ハ、妻子人質の儀ハ何様ニても苦かるましき躰二候、増右、内府へ被仰合筋目二候
 とでも、妻子など二人も成敗之義ハ有ましきと申なし候、是も黒白を存たる者ハ無余
 儀候、既ニ如此打被討候へ共、其者之妻子御成敗隠便故、先書にも如申犬山加勢衆
 謀叛なども出来候歟、さりとしてハ有間敷儀ながら是も妻子氣遣無之故と下々申候、爰
 元諸侍申され候も敵方之妻子五三人も成敗候ハ、心中替可申と申事二候、爰許承候通
 申入候、御分別ニ不過候事

（石田三成書状写（部分）「古今消息集」愛二〇一九号）

関ヶ原合戦を直前に控えた段階で、増田長盛が家康に対して行った、東軍諸将の人質の取り扱いについての取り決めは手温いといった石田三成の書きぶりは、先述の「二柳中興御系図御手柄物語覚」の中で、稲葉清六が、旧主家である一柳氏に言い放った言葉と重なる内容であり、前線の西軍諸将の苛立ちに基づいた認識といえよう。

結語

関ヶ原合戦の前段階、濃尾平野では激しい攻防が繰り広げられた。本稿ではこの地域の諸将について、両陣営の間でマージナルな位置に身を置く存在としてとらえ、慶長五年八月当時の犬山城の動向ならびに城主石川光吉が支配した木曾の情勢についてみてきた。そこで明らかになることとしては、

・石川光吉が支配した木曾の地に対して、家康は信濃（木曾）・東美濃に密接な関連をもつ勢力を送り込むことで、東山道方面軍本隊の地ならしを行っていたこと。

・こうした勢力は、山村氏、千村氏、馬場氏（何れも木曾谷関連）や遠山氏（東美濃関連）

のように、関東・家康の影響下に所在していたこと。

・濃州関ヶ原合戦では、木曾川を挟んで東西両軍のぎりぎりの駆け引き、攻防が行われていたこと。またその帰趨を決したのは、八月二十三日の岐阜城落城であったこと。

・東軍の諸将が一枚岩でなかったように、犬山城の諸将にも微妙な違いがあったこと。

なかでも開城に向けて尽力したのは籠城前から、家康のもとに弟・光直を証人（人質）として差し出し、連絡を取っていた加藤貞泰があげられること。

・城主石川光吉に対して、家康は西軍に与していることを知りながら看過し、丁重な対応がとられていたこと。

犬山城の開城を巡り、いわゆる西軍として籠城していた諸将と家康、そしてその取次の役割を果たした諸将との間でぎりぎりの交渉が行われた。結果城主石川光吉は関ヶ原本戦も西軍として戦い、改易（のちに五〇〇石・幕府御家人）されたが、その他の諸将は、東軍として関ヶ原本戦を戦い、本領を安堵ないし加増転封とされている。立地やタイミングの違いもあり、この後展開する大垣城の戦いなどに比べ平和裏の開城がおこなわれたのである。

注意すべきこととしては、東海道を上りつつある家康と犬山城の諸将とのやり取りには、尾張に先着している東軍の諸将や軍監の本多・井伊とのやり取りに比べ時間差が生じていることがあげられる。

また今回は、犬山城に拘留された山村道祐や、同城に籠城した諸将から差し出された人質問題にも触れたが、東軍の先遣隊諸将も同様に人質が取られ、池田輝政の居城三河吉田城に集められたといわれる。（「二柳中興御系図御手柄物語覚」）関ヶ原合戦における人質問題は、細川玉の悲劇が広く知られるが、これは細川家大坂玉造屋敷における特異な状況としてではなく、両軍を通じて広く存在した問題であることを理解する必要がある、今後の課題としたい。

績を讀える内容となっている。また【資料15】の文書には、東軍先遣隊を束ねる福島正則・池田輝政の両将、本多忠勝、井伊直政といった徳川の軍監が揃った形で、加藤貞泰、稲葉通重に対して大垣城からの蒞田に備え、牛牧村、本田村（旧本巢郡）に布陣するように命じていることから、九月三日までには、犬山城を開城し、東軍としての任務に付いたことがわかる。

【資料14】

切々被入念書状祝着之至候、殊犬山之儀其方以才覚早々相済候事令満足候、将又先手へ参陣候由尤候、今日至于清見寺令着馬候之間、頓而其表可着陣、猶期其節候、恐々

謹言

九月五日 家康（花押）

加藤左衛門尉殿

（大洲加藤文書・岐同文書二号）

【資料15】

態申入候、然者、大柿城中より蒞田ニ罷出候間、稲葉甲斐守貴所為押、うしき村、ほんてん村両所ニ御在陣可被成候、不及申候へ共、御精を被出、夜待等被仰付尤候、恐々

謹言

羽左衛門太夫

九月三日 正則（花押）

羽三左衛門

輝政（花押）

本多中書

忠勝（花押）

井「」

□ □（直政）

加藤左衛門尉殿

稲葉甲斐守殿

（大洲加藤文書・岐同文書二四号）

今回籠城した諸将の中で最も窮地に陥ったのが稲葉貞通・典通の父子である。美濃小原城主遠藤慶隆は、七月二十九日、稲葉氏に奪われた旧領郡上の所領回復の約束を家康から得た。そして、美濃攻めの先兵となった娘婿の金森可重とともに、九月一日稲葉氏の本拠地である八幡城を攻撃した。それに対して三日稲葉貞通・典通らは籠城していた犬山城から急を聞きつけて戻り激しい戦いとなった末、翌四日和睦を結んだ。【資料16】は、七月末段階に美濃の攻略戦を担った金森親子への指示が出されていること、【資料17】は、七日・犬山・郡上共に決着が着いた後の段階で初めて稲葉貞通の動向が判明するもので、永井直勝が取次いでいる。内容的には、井伊直政の要求に応じて城を明け渡したこと。貞通はすでに長島城に加勢したことがわかる。一方典通は【資料15】にある通り、開城後すぐに美濃での展開が命じられている。犬山城籠城組の中で、徳川氏との関りが最も希薄であった稲葉氏は、結果的にはぎりぎりの段階で東軍に味方するといった判断がおこなわれたといえよう。

【資料16】

濃州境目之儀、随分成次第可有御才覚候、恐々謹言

七月廿九日

金森法印

御名乗御直判

同出雲守殿

（金森文書・岐同文書九号）

【資料17】

永井右近所迄之書状令披見候、仍今度犬山被相籠候処ニ、依井伊兵部少輔申被明渡、為長島加勢被罷移由尤候、委細右近大夫可申候、恐々謹言

九月七日 家康（花押）

稲葉右京亮殿

（稲葉家文書・愛二〇二号）

また、関ヶ原合戦直前の九月十二日、石田三成が大和郡山城主増田長盛に対して出した書状

【資料10】

尚、夜を日二次、當地迄御參陣御尤存候、遅候へハ最前の首尾ちかい申候、
當地御着候ハ、又内府へ可申遣候、以上

廿四日之御状參着給候らん、即御報申立候キ、先書如申候、御質物之儀、羽柴左衛門大夫殿より、其許へ被遣候衆へ、被入御念御渡候、急度當陣へ可被成御越候、次被仰越候御紙面之通、内府へ被申遣候、最前より關東迄被仰通候儀、此節候間、弥御忠節被存事候、御用之儀、何分ニも拙者御馳走可申候間、可御心易候、何も懸御目可申達候、恐惶謹言

井伊兵部少輔

八月廿八日

直政（花押）

加左衛門様

關長門様

人々御中

〔大洲加藤文書・岐同文書二号〕

【資料11】

尚、其城御才覚候而、早々渡申候様ニ可被成候、城才覚被成、其上貴殿へも此方被存可被成候、以上

乍幸便一書申入候、其城はや御渡候事候間、貴所御作上之儀、涯分肝煎可申候間、早々我々陣所迄御出可被成候、最前此表へ陣寄之刻も、貴所御老母之儀も無異議様ニと、我々折紙を遣申、何篇ニも如在申間敷候、早速御出可被成候、恐々謹言

本多中務

八月廿八日

忠勝（花押）

加藤左衛門尉殿

〔大洲加藤文書・岐同文書二五号〕

こうした、交渉の中で、加藤・竹中は家康に対して、犬山城開城の意思を伝え（両通之書状）たようで、それに対して家康は次の書状を送っている。

【資料12】

両通之書状令披見候、然者前廉首尾無相違忠節之条、感悦之至候、今日三日、至小田原令出馬候、急速其表可為著陣候、弥其元可被入精儀肝要候、恐々謹言

九月三日 家康（花押）

加藤左衛門尉殿

竹中丹後守殿

〔竹中文書・愛二〇〇七号〕

また、城主石川光吉に対しては、本多正純が古田織部（重然）、田中清六（正長）を介した交渉をおこなっている。【資料5】時点での態度表明は結果として裏切られ、【資料13】時点では開城に向けた同意の意向が示されたと考える。この段階では開城する城主への書状ということもあつてか、丁重な文言となっている。

【資料13】

追而古織かたへ之書状得其意候、已上
兩人かたへ之御状令披見候、仍今度不慮之儀無是非仕合共候処、日来之御好味思召可有忠節由満足候、委細田中可申候条令省略候、恐々謹言

九月四日

御諱御判

石川備前守殿

〔譜牒余録〕三六・愛二〇〇八号〕

犬山城の開城が明らかに記されているのが【資料14】である。これは、五日駿河清見寺にいる家康からの文書で「殊犬山之儀其方以才覚早々相済」との表現があり、加藤貞泰の功

これは、東軍の軍監井伊直政・本多忠勝に対して、尾張に布陣していた黒田長政等から出されたもので、先遣隊の陣容が揃ったので犬山に付城を築いたことが記されている。犬山城の籠城に対抗したものであり、ここから八月十九日時点で犬山籠城は続いていたことがわかる。また、「天下之勝負川越二相究候」との認識を示し、木曾川を挟んだ決戦を控え家康の出馬を強く求めている。東軍の諸将にとっても疑心暗鬼の状態が続いており、羽柴を称する諸将が「小山評定」の結果、一枚岩となつて東海道を西へ上つたとするのは、江戸幕府成立の序章として出来すぎた物語といえよう。この後、東軍先遣隊は、八月二十二日木曾川を越え、翌二十三日岐阜城は落城した。このことが、潮目を大きく変える戦いまさに「天下之勝負」であつたことを示す資料がある。

【資料8】

以上

内々如申候、中筋岐阜昨日乗落候、然處、為後巻治部少輔先手之者共、江戸川端迄差出候、即及一戦追崩悉討果候、早々内々其筋目可引退候、此通駿河衆へも申遣候、可被成意候、恐々謹言

井伊兵部少輔

八月廿四日

直政（花押）

竹中丹後守殿

加藤左衛門尉殿

関長門守殿

人々御中

（大洲加藤文書・岐同文書三号）

岐阜城落城の翌日、犬山城籠城中の竹中・加藤・関の三将に対して、岐阜城の落城、石田三成による後巻の失敗（河渡川の戦い）を伝えることで開城を促すとともに、攻城にあたる駿河

衆（中村一栄・一忠のこと）にもこの旨が伝えてあるとする井伊直政の書状である。また、【資料9】は翌二十五日に加藤貞泰の叔父光政から美濃布陣中の山内一豊に対し、貞泰の犬山籠城は「めいわく」（不本意）である。城主の石川光吉が決断しなければ開城できないが、貞泰も尽力しており、本多忠勝・井伊直政からの書状も得ていると伝える。

【資料9】

乍好便以一書申上候、今度之御出陣御苦身共奉察候、今度之御手がら共中申上もおろかなる御事ともに候、左衛門尉いぬ山に居申候て、なに共めいわく仕候、寔石備前も御ことわり申候ハでなり申すまじく候間、やがて罷出候ハんと存事に候、この方之儀者右衛門殿きも入被申候て、本多中務殿・井伊兵部殿御両所之御判形とり候て被越候間、満足仕候、是も貴公様御祐と存事に候、以使者も御見廻申度存候へ共、手前取紛忘却仕故不能其使迷惑仕候、恐惶謹言

加藤図書

八月廿五日

光政

山对州様

人々御中

（御家伝羽襲・愛九九一号）

そして、その三日後・二十八日の井伊直政から加藤貞泰への書状【資料10】には、人質については福島正則が派遣した者へ注意して渡すこと、家康への取次に尽力するので急ぎ当陣所に参じることを求めている。【資料8】に比べ、宛所が薄礼であること、追而書の厳しさから直政の苛立ちが読み取れる。また、同日付の本多忠勝の書状【資料11】では、貞泰の母の扱いついて気遣う内容が読み取れる。これらの資料から、「御質物」とは籠城した諸将からの人質差出であると考える。またそれとは逆に、山村道祐のように犬山城に預かつていた人質もこの頃解放された可能性も考えられよう。何れにせよ、八月末には犬山城開城に向けた細かい詰め交渉が、おこなわれていたことがわかる。

える形で木曾路を制圧し、美濃への侵攻を目指していった。この機に乗じて山村、千村、馬場の各氏は木曾、遠山氏は東美濃の地で、豊臣政権下での失地を回復することを目指したのである。このように石川光吉の支配下にあった木曾の地は、東軍の諸勢力によって制圧されていった。

四、犬山城をめぐる攻防

これまでみたように、石川光吉は西軍の一翼として、東国への調略を進める一方、次の資料からは、近江出身の豪商田中清六を介して好を通じる手紙を家康との間で交わしていたことがわかる¹¹⁾。

【資料5】

先度飛脚到来之砌、可為返礼之處、飛脚其儘帰候間、無其儀候、其方兄弟之事、連々懇切之事ニ候間、弥不可無沙汰与存、委細田中可申候、恐々謹言

八月八日

御諱御判(家康)

石川備前守

(譜牒余録) 三十六種葉丹後守之下・愛九三三号

ここで、留意すべきは家康が「連々懇切之事」としたのは、「其方兄弟」であることである。宛所は光吉のみであるが、その他に家康が認識した兄弟の存在がわかる¹²⁾。

それでは、石川光吉たちが、犬山城に籠城したのはいつのことであろうか、次の資料にその姿がうかがえる。

【資料6】

此者加藤左衛門尉長敷者候、然者犬山へ左衛門尉相籠付而、様子之儀申遣候、於其地羽左太令相談、可然様才覚无候、猶彼口上可申候、謹言

八月十二日

家康(花押)

井伊兵部少輔とのへ

本多中務太輔とのへ

(大洲加藤文書)・愛九四一号

八月十二日、江戸に留まっていた家康のもとに加藤貞泰の「長敷者(=重臣)」が訪れ、犬山城への籠城が始まったと報告した¹³⁾。家康は井伊直政、本多忠勝のもとにこの使者を送り福島正則と相談の上、対応するように求めている。貞泰は、すでに弟加藤平内光直を証人として差出してしており東軍に味方する姿勢を示したうえでの対応であった。これによれば、犬山城の籠城戦は八月上旬には始まっており、尾張で中心的な役割を果たしていた福島と軍監井伊・本多はこうした犬山城の状況に対応できる場所に所在していたことがわかる。

【資料7】

猶以隠密之書中ニ候之条、御他言・御他見在間敷候、即此状可有火中候、以上態以飛札申入候、仍而此表之儀跡々人数相揃候、内々犬山表ニ押之城ヲ仕、各御出次第二川ヲ越可相働旨惣談相究候処、村越毛介殿為御使御越候て俄談合相替、とても

内府様御馬きりと出申はか不参候間、何事も不入義候、一刻も急川ヲ越、いか鉢ニ成共可相果候由誰々なく就被申出、各其分ニ同意ニ候、然者天下之勝負川越ニ

相究候間、御両所急御越候て今一往御談合候て尤ニ存候、御人数ハ被為置、御自身迄

片時もはやく御出専用存候、恐惶謹言

黒甲斐守

八月十九日

長政(花押)

徳永法印

寿昌(花押)

奥藤兵衛

三明(花押)

井兵部様

本中書様

人々御中

(井伊達夫氏所蔵文書)・愛九五九号

五日中午遠久兵其地へ可有御越候事、

(3) 一、遠久兵へ金子五両渡しにて越申候、ふかしにて米之調被成、其地之者共かつへ候ハぬやうニ可被成事

(5) 一、小笠原靱負、其許かせいとして人数被遣候、にへ川辺ニなり共、又福嶋辺ニなり共、貴所達思召し仕候置御申可在候事

(6) 一、てつほう・玉葉以外つけさせ越申候つる、相届申候故事

(7) 一、昨廿日、馬場半左、御目見え被申候、我々妻子有所てうふ二つかまつり、其許へ可参之由被仰出候、如何ニも仕合よく候にて、半左も下総へ参、三・辰致取合、いへこの辺ニ各妻子有付候て、其許可参候由御座候事

(8) 一、半左へもてつほう以下被成御渡候事

(10) 一、道幽(男) 犬山ニいまた御逗留之由、きつかい仕候、大手へ御立之衆ニも御朱印を被遣候、可御心安事

(14) 一、金森法印も其谷御かため候事御満足之事

(15) 一、ひかしミのへの手遣、追而可被成之由御座候、遠山勘右衛門殿三州口を被参候事

(25) 一、今度貴所達へたいし、別心仕候者、何様ニもいけ取、以俄者被仰付、道幽(男)者しち物かへニも才覚仕度之事

(26) 一、原与左衛門方、遠山勘右を頼ミ候て、昨廿日ニ我ら所へ参候間、何事も貴所達と談合可仕候由申候、随者其谷御かため之内ハ馬場半左致談合、とくと相延可申候、其御心得可被成之事

(27) 34 略

八月廿一日

大十兵衛

長安(花押)

山甚兵様

千平右様

御報

この文書からは、次のような情報を得ることができる。

1、山村良勝、千村良重の両名は、大久保長安を取次として徳川方の傘下にあり、すでに木曾谷に侵攻していること。そのため、慶長五年八月、石田三成、大谷吉継、石川光吉らが、東国に発した書状を奪取し江戸の家康の許に報告したこと。(資料 3・1(1) 他)

2、山村、千村へは鉄砲、火薬を送ったうえ、小笠原長巨、遠山友政(苗木遠山家)、馬場昌次(半左衛門)を加勢として派遣、あわせて金森長近も布陣したこと。(資料 2・5・6・7・8・14)

3、犬山城には山村良勝の父良候が、逗留し(拘束され)ているが、犬山城を守る諸将には、家康の朱印状が出されていること。木曾筋で対立するものがあれば、生け捕りにして犬山城の良候と人質交換するように仕向けること。(資料 10・25)

4、天正十一年、森氏との争いの中、東美濃を追われた遠山友政は家康のもとにいた。今回木曾谷に行く手筈は整っており八月二十一日から五日の内に到着の予定である。友政には、大久保長安が五両用立て、現地で食糧不足ならぬように深志で米の調達を指示している。(資料 2・3)

5、東美濃への出兵は追って行う予定であること。その際、遠山利景(明知遠山家)は三河口から攻略を進めること。(資料 15)

このように、木曾氏の旧臣山村良勝、千村良重はすでに本貫であった木曾谷に戻り東軍としての活動を本格化させており、八月十一日には塩尻を経て翌十二日には木曾谷に入り鬻川の砦を攻略していた。一方、木曾谷は石川光吉の支配下にあったことから、山村良勝の父良候は犬山城で人質とされていた。

こうした状況に対し、木曾谷に精通した山村、千村に加え木曾氏の一族である馬場の諸氏、かつて東美濃の領主であった遠山友政、伊奈谷出身の小笠原長巨、飛騨の金森長近・可重を加

美濃黒野城主加藤貞泰に宛てたこの家康文書によれば、これ以前に上方争乱の雑説があるため、上杉攻めへの参加を先延ばしにしているとの報告に対して、家康が了解するとともに織田秀信とよく相談し善処することを求めている。このことから、織田秀信も加藤貞泰同様、家康の軍事行動に従う姿勢を示していたことが推定される。

しかし、最終的には美濃の盟主織田秀信の西軍への参加の決断により、美濃の諸将の大半はそれに従い、東軍に対して大垣城、竹ヶ鼻城、岐阜城、犬山城を結ぶ防衛線（即ち木曾川筋での防衛線）を引くこととなった。

二 犬山城の位置付け

先述の、木曾川筋での防衛線を西軍が意図したとすれば、一点大きな疑問が生ずる。それは、大山が木曾川左岸にあり、尾張国で唯一の西軍拠点になることである。即ち木曾川で扼されていることから、美濃側からの後援は困難な位置におかれることである。

この理由は、西軍は先述のとおり福島や一柳ら尾張を本拠とする武将への調略や織田秀信等の尾張北部への進出など、尾張国への展開を考えており、それが実現した際には、犬山城の存在は大きな一手となるはずであった。しかしその計画は画餅に過ぎず、結果犬山城は、東軍勢力下に孤立することとなる。なお犬山城籠城にあたり城主石川光吉のもとに稲葉貞通・典通親子、加藤貞泰、竹中重門、関一政が加わり籠城していたことが確認できる。

石川光吉（貞清）は、美濃鏡島城主の流れを汲むとされ、豊臣秀吉に使番として仕えた。

天正十八年（一五九〇）の小田原の役に随い、尾張犬山一万二千石を与えられた。この時木曾義政の下総移封がおこなわれ、信濃木曾の蔵入地十萬石の代官も務めた。また、光吉の妻は石田三成の娘ともいわれ、豊臣政権中枢に近い人物であった。こうしたなか、慶長五年の関ヶ原合戦を迎えることになる。

三 木曾谷の情勢

当時、石川光吉が支配した木曾谷の情勢について次の資料を紹介する。慶長五年八月二十一日付山村良勝・千村良重宛徳川家康書状ならびに同所宛大久保長安書状である。宛所にある山村良勝と千村良重は、木曾氏に仕え木曾谷の支配を支えたが、天正十八年木曾義昌が下総阿知戸一万石に移封されたため両氏はそれに従った。その後間もなく義昌が亡くなり、嫡男義利は不行跡を理由に改易されたため、良勝の父良候のみ木曾の地に留まり石川光吉の支配下に入った。しかし、山村良勝、千村良重の二人は主家を失くしたまま、下総佐倉など関東の地に留まったとされる。この文書はその二人に宛てられたもので、家康の書状と大久保長安の添状が確認できる。

【資料3】

其許弥堅固申付候由、尤肝要二候、此度之忠儀感悦候、然者、為加勢遠山久兵衛・

小笠原原貞（負カ）・今泉五介差遣候条、可相談候、委細大久保十兵衛可申候也、

八月廿一日

山村甚兵衛とのへ

千村平右衛門とのへ

【資料4】

其許様子、十六日之御状、昨廿日三高井土（戸カ）ニをひて令披見候、則江戸へ御状

共差遣申候、此中十一日之心得其許之様子被為聞度之由、御意候つる間、御中間衆飛

力被越申候つる事、

（これ以降、三十四項目にわたる条々が出されているが、本稿では関連する項目のみ抄録する。「(数字)」は筆者注

記・項目の順番)

(1) 一、上方石治少・大刑・石備書状、御才覚にて御取被成候、則状江戸へ致進上候、

定而可為御大慶候事

(2) 一、我ら者廿日の朝迄、江戸ニ罷有、遠山久兵衛殿其許へ被遣候しくミいたし候、

濃州関ヶ原合戦と犬山城

山田 昭彦

The expansion of Sekigahara Battle in Mino Province

: A Focus on The Battle of Inuyama Fort

YAMADA Akihiko

関ヶ原合戦の前段階、濃尾平野では激しい攻防が繰り広げられた。本稿では西軍の拠点となった犬山城籠城戦を通じて、慶長五年八月当時の犬山城の動向ならびに城主石川光吉が支配した木曾の情勢について考察をおこなう。

一 濃州関ヶ原合戦

慶長五年（二六〇〇）関ヶ原合戦直前のおよそ一ヶ月にわたり、美濃の各地では断続的な戦いが繰り広げられた。八月十六日福東城の戦い、二十二日木曾川の渡河戦と米野の戦い、竹ヶ鼻城の戦い、二十三日岐阜城の戦い、河渡川の戦い、九月一日〜四日の郡上合戦、九月十四日杭瀬川の戦いが各地で繰り広げられ、最終的に九月十五日の関ヶ原合戦を迎えることとなった。まさに、濃州関ヶ原合戦が展開したのである。

しかし、美濃平野で決戦に及ぶことを両軍が予め約していたわけではない。西軍・石田三成は、慶長五年八月五日の段階においても、清須城主福島正則の去就は「御理申半二候」（真田宝物館所蔵文書・『愛知県史』³⁾九二七号）との見通しを持っていた。羽柴左衛門大夫正則に一縷の望みを賭けていたということであろうか、

西軍の調略工作は尾張国内に及んでいた。七月三十日付の真田昌幸宛石田三成書状（真田宝物館所蔵文書・愛九一四号）に次の記述がみられる。

【資料1】

一 今度上方より東へ出陣之衆、上方之様子被承悉帰陣候、然者於尾・濃令人留、帰陣之衆一人く之所存、永々之儀秀頼様へ無粗略究仕、帰国候様二相卜止候事、

ここからは、七月末の段階で、石田三成の作戦として、「尾・濃人留」により上杉攻めを中止し上方に向け帰還する諸将に対し、豊臣秀頼へ「無疎略究仕」ようにとの計略があったことがわかる。

また、同じく八月六日付の真田昌幸宛石田三成書状（歴代古案・愛九三三号）に「此方為仕置明後八日尾州表へ被出候、岐阜申談候、不可有御氣遣候」とあることや、尾張国飛保（葉栗郡）の曼陀羅寺に、石田三成（八月十三日付）・織田秀信（八月日付）が相次いで禁制を出していることが確認できる。（曼陀羅寺文書・愛九四二二〇六号）

その他、一柳直盛に関わる話として「一柳中興御系図御手柄物語覚」⁴⁾があげられる。この資料は、合戦当時黒田城城主であった一柳直盛の子孫が江戸時代にまとめたものである。上杉攻めに同行していた一柳直盛は、八月九日黒田城へ帰城した。そこへ旧臣で小川土佐守（祐忠・妻は一柳直高女）の家来となっていた稲葉静六が、石田三成の書状を携え密かに木曾川を渡り訪れ、同心すれば美濃一國並びに金銀御望次第といった誘いをかけた。しかし誘いを直盛が断つたところ、人質の直盛の母（勝林院）と妻子を三津屋之渡堤の上で処刑すると強圧的な姿勢をとったため、直盛によって追いつ返されることとなった。江戸時代「一柳氏の「御手柄」を示す上で当然の記述であるが、これらことから西軍が尾張国の攻略を進めていた様子が確認できる。

七月十七日毛利輝元を大坂城に迎えた西軍は、瀬戸内地域の制圧、伏見城攻略、田辺城・大津城包圍戦、安濃津城攻略、水軍による尾張沿岸部への攻撃と多方面への展開（計画）を進めた。こうした情勢下、七月の後半時点では秀信の去就は揺れていた。

【資料2】

就其元雜説出陣延引之由尤候、愈岐阜中納言殿有談合、仕置等肝要候、猶加藤太郎左衛門可申候、恐々謹言

七月廿日

家康公

御諱御書判

加藤左衛門尉殿

〔北藤録〕⁵⁾